

箱崎遺跡5

——箱崎遺跡群第9次調査——

蒲田部木原遺跡5

——蒲田部木原遺跡群第5次調査——

1998

福岡市教育委員会

箱崎遺跡5

——箱崎遺跡群第9次調査——

蒲田部木原遺跡5

——蒲田部木原遺跡群第5次調査——

1998

福岡市教育委員会

序

玄界灘に面して広がる福岡市には豊かな歴史と自然が残されており、これを後世に伝えていくことは現代に生きる我々の重要な務めであります。

福岡市教育委員会では近年の開発事業に伴い、やむをえず失われていく埋蔵文化財について事前発掘調査を実施し、記録の保存に務めているところであります。

本報告による箱崎遺跡群第9次調査ならびに蒲田部木原遺跡群第5次調査では、多くの貴重な成果をあげることができました。

本書が文化財保護へのご理解と認識を深める一助となり、また研究資料としても活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行に至るまで多くの方々のご理解とご協力を賜りました事に対し、心からの謝意を表します。

平成10年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 町田 英俊

本文目次

第一章 東区の歴史的・位置的環境	(本田浩二郎) 1
第二章 箕崎遺跡第9次調査	(本田浩二郎) 3
1、調査に至る経緯	3
2、調査体制	3
3、箕崎遺跡群の概要	3
4、調査の記録	6
(一) 概要	6
(二) 挖出遺構	6
(三) 出土遺物	10
(四) 小結	21
第三章 蒲田部木原遺跡第5次調査	
I はじめ	(長家伸) 22
1 調査に至る経過	22
2 調査体制	22
II 調査の記録	22
1 調査概要	22
2 遺構と遺物	23
3 小結	31

挿図目次

第1図 周辺遺跡分布図 (1/80,000)	2
箱崎遺跡第9次調査	
第2図 調査地点位置図 (1/4,000)	5
第3図 遺構配置図 (1/80)	7
第4図 遺構実測図1 (1/40)	8
第5図 遺構実測図2 (1/40)	9
第6図 遺構実測図3 (1/40)	10
第7図 遺物実測図1 (1/3)	11
第8図 遺物実測図2 (1/3)	13
第9図 遺物実測図3 (1/3)	15
第10図 遺物実測図4 (1/3)	17
第11図 遺物実測図5 (1/3,1/4)	19
第12図 遺物実測図6 (1/1)	20
蒲田部木原遺跡第5次調査	
第13図 調査地点位置図 (1/4,000)	23
第14図 調査区位置図 (1/1,000)	24
第15図 遺構配置図及び調査区土層	
(1/600,1/40)	25
第16図 溝断面実測図 (1/40)	26
第17図 溝出土遺物実測図 (1/1,1/3)	27
第18図 S C 002 及び出土遺物実測図	
(1/40,1/4)	28
第19図 S K 008 及び出土遺物実測図	
(1/40,1/4)	29
第20図 その他の遺物実測図 (1/3)	30
付図 調査区全体図 (1/150)	

写 真 目 次

箱崎遺跡第9次調査

- 写真1 調査区全景北側（南から）
写真2 調査区全景南側（南から）
写真3 S E - 01 完掘状況（北から）
写真4 S E - 06 完掘状況（北から）
写真5 S E - 08 完掘状況（東から）
写真6 S E - 09 完掘状況（南から）
写真7 S E - 10 完掘状況（南から）
写真8 S E - 12 完掘状況（東から）
写真9 S E - 01 出土遺物
写真10 S E - 09 出土遺物
写真11 S E - 04 出土遺物
写真12 S E - 09 出土遺物
写真13 S E - 09 出土遺物
写真14 S E - 10 出土遺物
写真15 S E - 10 出土遺物
写真16 S E - 10 出土遺物
写真17 S E - 10 出土遺物
写真18 S E - 10 出土遺物
写真19 S K - 22 出土遺物
写真20 S K - 28 出土遺物
写真21 S K - 28 出土遺物
写真22 S K - 62 出土遺物
写真23 S K - 64 出土遺物
写真24 S E - 09 出土遺物

蒲田部木原遺跡第5次調査

- 写真1 調査地点全景（北東から）
写真2 1 区全景（東から）
写真3 1 区全景（西から）
写真4 2 区全景（西から）
写真5 3 区全景（西から）
写真6 S D 006（西から）
写真7 S D 001 土層
写真8 S D 004 土層
写真9 S D 007 土層
写真10 S C 002（南から）
写真11 S C 002（西から）
写真12 S K 008（東から）
写真13 S K 008 出上状況（北から）
写真14 S K 008 土層
写真15 出上遺物

第一章 東区の歴史的・位置的環境

箱崎遺跡群・蒲田部木原遺跡群は東区の南端と東端に位置する。ともに福岡市東区の遺跡であるが蒲田部木原遺跡群は一部柏屋郡柏屋町にまたがっている。旧柏屋郡は、近世以降北部の平野部である裏柏屋（現福岡市東区香椎・唐原・和白・柏屋郡古賀町・新宮町）と表柏屋（現福岡市東区箱崎・多々良・蒲田・柏屋郡柏屋町・久山町・篠栗町・宇美町・志免町・須恵町）に二分されてきた。表柏屋は、多々良川・宇美川・須恵川などによって形成された半野で、月隈丘陵をはさんで福岡平野に隣接し、裏柏屋とは標高2~300mの立花山・城ノ越山・遠見岳などで区分されている。箱崎・蒲田部木原遺跡はともに裏柏屋に属しており、箱崎遺跡群は宇美川が形成した古砂丘上に、蒲田部木原遺跡群は多々良川が形成した冲積地に向かって東方向より張り出した低丘陵の先端部に位置している。

箱崎遺跡周辺では、道路の拡幅や市街地の再開発とともに発掘調査が実施され、多くの遺跡が知られている。箱崎遺跡群においても、これまで13次の調査が行なわれ古代から中世にかけての集落跡が検出されている。また、箱崎遺跡の占地する古砂丘上には、弥生時代の集落跡である吉塚遺跡や堅柏遺跡などが見られ、古墳時代では堅柏遺跡で前期に属する方形周溝墓が検出されている。古代では古塚本町遺跡、堅柏遺跡などで集落跡が検出されている。特に堅柏遺跡群においては、越州窯系青磁や墨書き土器、縁結陶器などの遺物が出土しており、単なる集落ではなく何らかの公的施設の存在の可能性が考えられる。箱崎遺跡群で検出されている最も時期的に遅い遺物は第6次調査で出土した縄文時代後期から弥生時代初頭に属する石斧であるが、現在該期に相当する遺構は検出されておらず、この砂丘上でどの時点から遺跡が形成されはじめたのかは、いま検討中である。

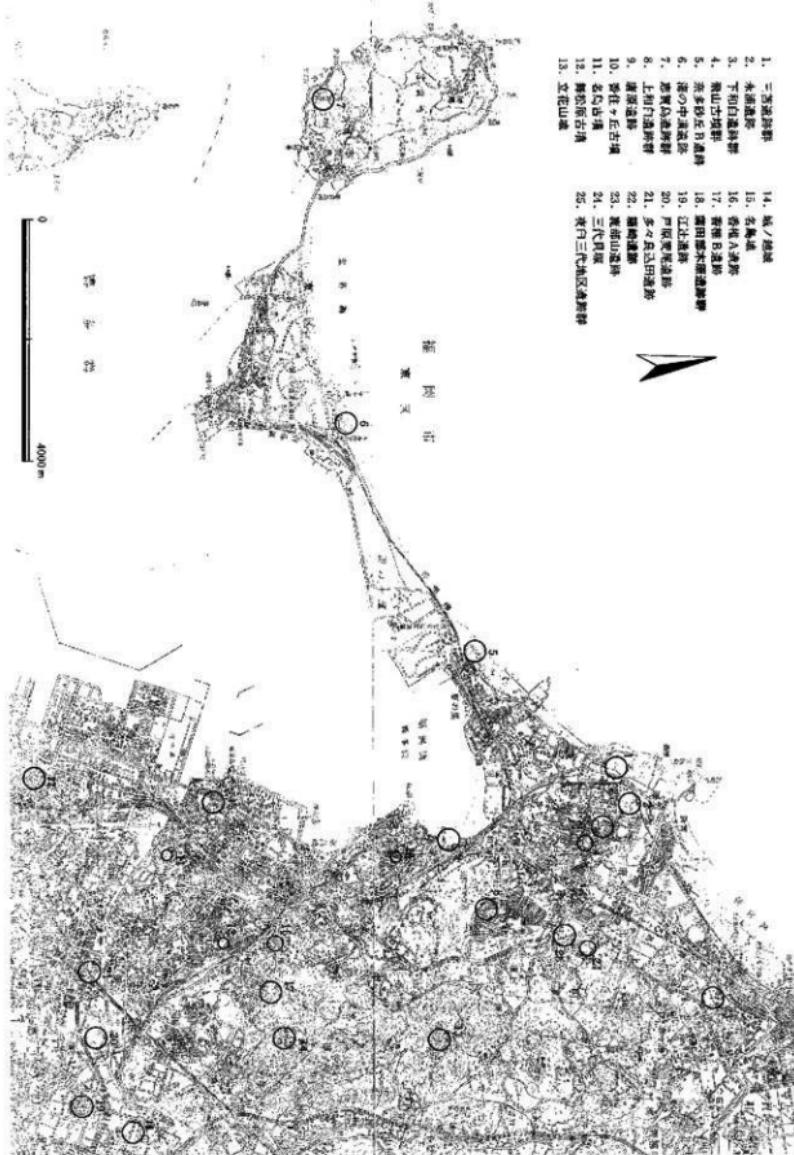
蒲田部木原遺跡周辺では、九州縦貫自動車道や工場・倉庫の建設に伴う多くの発掘調査が実施されており、多くの遺跡が知られるようになった。蒲田部木原遺跡においてもこれまで4次の発掘調査が行なわれ旧石器時代から中世までの遺物・遺構が発見されている。

また、蒲田部木原遺跡のすぐ北側においても蒲田水ヶ元遺跡が調査され弥生時代後期から古墳時代にかけての堅穴住居跡・掘立柱建物跡・周溝造構などが検出されている。丘陵の西端には、前方後円墳と円墳で構成された部木八幡古墳群があるが、現在のところ未調査である。

蒲田部木原遺跡群の占地する丘陵から小さい谷を隔てた南側の丘陵上には、福岡県指定史跡である平塚古墳が存在している。町営住宅建設中に発見されたもので、弥生時代終末頃の横丘墓として知られている。大型の箱式石棺を主体として、墳丘裾部付近に小型の石棺をもち、大型石棺内からは管玉17点、棺外からは内行花文鏡が出土している。

表柏屋一帯には、平塚古墳と同時期と見られる墳丘墓が点在している。名子道2号墳は、大型箱式石棺の周囲に列石を巡らして墓域を画し、石棺上に扁平な石を積み上げて墳丘をつくる。この他、酒殿遺跡・龜山神社古墳からも大型箱式石棺が検出されている。これらの墳丘墓の被葬者は小地域を単位とした盟主層と考えられている。

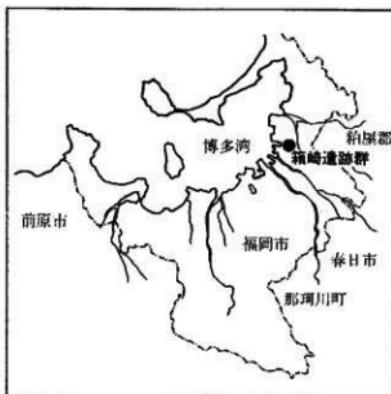
このほか、周辺では縄文時代晩期の人規模な集落遺跡である江辻遺跡や中世の集落と居館が検出された戸原安尾遺跡などの多くの重要な遺跡が存在している。



第1図 周辺遺跡分布図(1/80,000)

箱崎遺跡 5

—— 箱崎遺跡群第 9 次調査 ——



遺跡略号 H K Z - 9
調査番号 9644

例 言

1. 本章は、東区箱崎一丁目 1935-1 における共同住宅建設に先立って、福岡市教育委員会が平成 8 年度（1996 年度）に実施した箱崎遺跡群第 9 次調査の発掘調査報告書である。
2. 本章の執筆・編集には本田浩二郎があたった。
3. 本章に使用した遺構実測図は大庭康時・本田が作成した。また、製図には本田があたった。
4. 本章の遺構実測図中に用いている方位は、すべて磁北である。
5. 本章に使用した遺物実測図の作成・製図は本田が行なった。
6. 本調査で出土した銅錢・銅製品・鉄製品は、大庭哲子が鋳落とし・判読し、拓本を作成した。
7. 検出した遺構については、調査時に検出順に通し番号を付した。本章では、遺構の種類別に抽出し番号を付け、遺構の生活を略号で頭に付して呼称している。遺構略号は非戸（S E）・土坑（S K）・溝（S D）・ピット（S P）である。
8. 遺物番号は通し番号とした。なお挿図中の遺物番号と写真中の遺物番号は一致する。
9. 本章で使用した写真は大庭・本田が撮影した。
10. 本調査に関わる記録・遺物類は報告終了後、福岡市埋蔵文化財センターにおいて収蔵・管理・公開される予定であるので、活用されたい。

遺跡調査番号	9644	遺 跡 略 号	H K Z - 9
調査地地番	東区箱崎一丁目 1935-1	分布地図番号	34-
開発面積	220 m ²	調査面積	191 m ²
調査期間	1996年10月2日～10月29日		

第二章 箱崎遺跡第9次調査

1. 調査に至る経緯

平成8年(1996年)8月6日、高橋市雄氏より福岡市教育委員会埋蔵文化財課に対して、福岡市東区箱崎一丁目1935-1番の共同住宅建設予定地内における埋蔵文化財事前査査願が提出された。申請地は箱崎遺跡群の範囲内に含まれている地点であること、現在の箱崎宮境内に隣接していること、さらに第2次調査地点に近接していることなどから、埋蔵文化財課では査査願を受けて96年8月9日に試掘調査を行なった。現状は駐車場で、調査の結果、申請地内において現地表面より1.5~1.7m下の褐色砂層面で造構が比較的良好な状態で残っていることを確認した。この成果をもとに協議を行ない、工事によってやむを得ず破壊される部分については発掘調査を行ない、記録保存を図ることとなった。発掘調査は福岡市教育委員会埋蔵文化財課がこれを行なうこととなり、1996年10月2日着手し、10月29日に終了した。

2. 調査体制

調査委託	高橋 市雄
調査主体	福岡市教育委員会 教育長 町田英俊
調査統括	同 埋蔵文化財課 課長 荒巻 雄勝 第2係長 山口 謙治
調査庶務	同 埋蔵文化財課 第1係 西田 結香(前任) 河野 淳美(現任)
調査担当	同 埋蔵文化財課 第2係 松村 道博 池田 祐司(試掘調査) 大庭 康時 本田浩二郎(本調査)
調査作業	石川 君子 江越 初代 大庭 智子 河野 信子 清村 和恵 杉山 正孝 関 加代子 関 義種 曽根崎昭子 能丸努津子

調査期間中には株式会社東部産業の方々に、多くの配慮を賜った。記して感謝申し上げる次第である。また福岡市教育委員会埋蔵文化財課の山口謙治氏、大庭康時氏をはじめとする先輩、同僚諸氏から多くの助言をいただきいた。深く感謝すると共に、本報告書に十分に活かしきれなかったことをお詫びしたい。

3. 箱崎遺跡群の概要

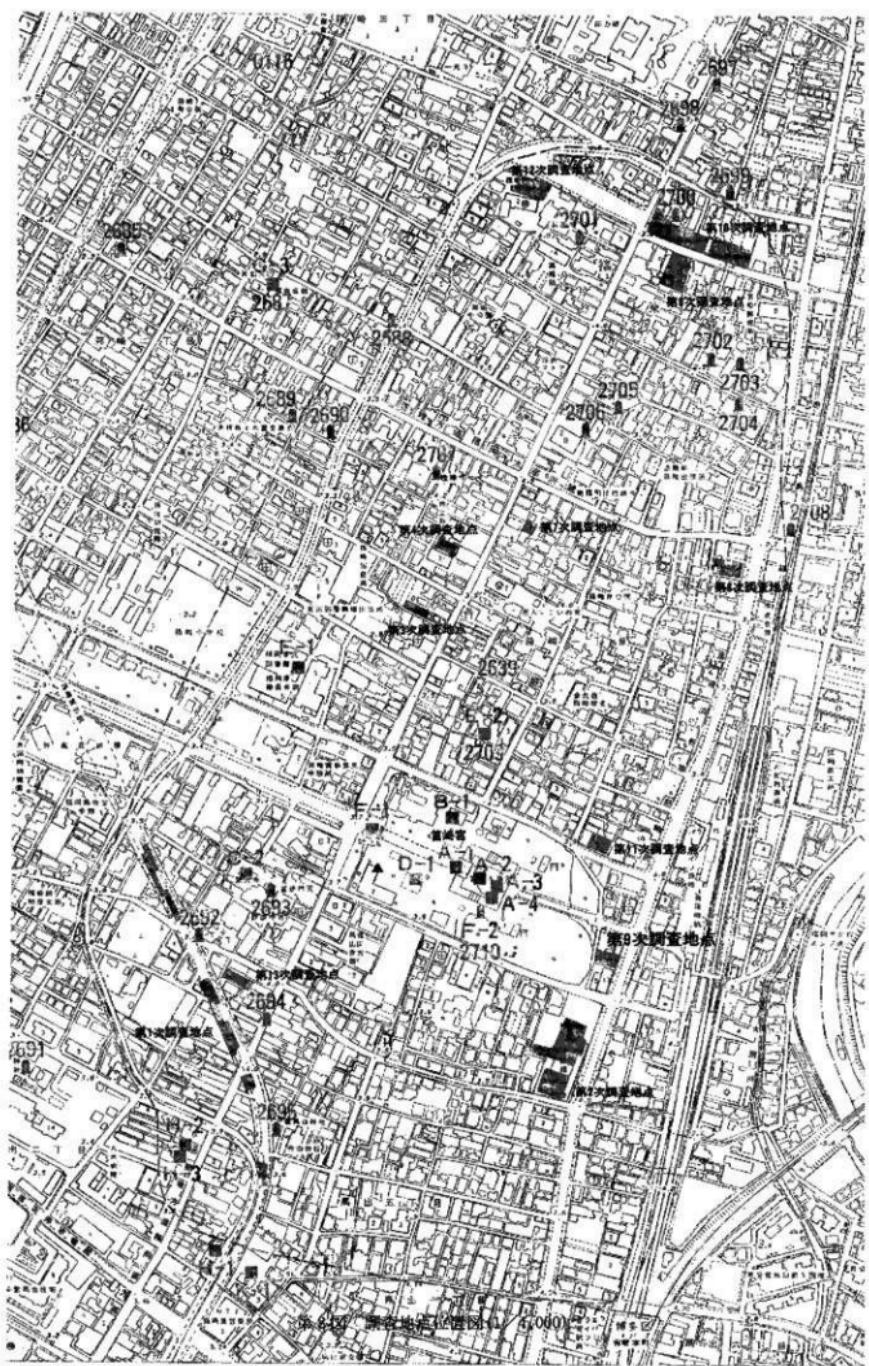
箱崎遺跡群は、福岡市の東北部に位置し宮崎宮を中心として営まれてきた古代から中世・近世までの遺跡群で、特に中世においては博多遺跡群と共に对外交渉の拠点として重要な役割を担っていた。この遺跡群は、博多湾東岸に形成された千代松原から箱崎まで南北に伸びる古砂丘上の北端部に立地する。遺跡の占地する砂丘は御笠川と宇美川に挟まれ、標高4m前後を測り、砂丘の南側には吉塚遺跡、堅粕遺跡、吉塚本町遺跡、吉塚祝町遺跡等が分布し、それぞれの遺跡は砂丘上の微高地に占地し

ている。各遺跡群の境界は現在調査事例が少ないため確定できていないが、後背湿地や砂丘鞍部によって画されているものと思われる。既往の調査成果から箱崎遺跡群の範囲は、標高3.5～4.5mを測る砂丘の尾根上に東西に約400m、南北に約1000mの範囲で分布していることが確認されている。

箱崎遺跡群ではこれまでに13回の発掘調査が実施されている（平成10年3月現在）。各々の調査成果は後述するとして、調査地点と調査年度についてのみ列記しておく。

第1次調査	東区馬出2丁目・5丁目地内	1983年度調査	1988年度報告	市報193集
第2次調査	東区箱崎1丁目18-32外	1986年度調査	1987年度報告	県報79集
第3次調査	東区箱崎1丁目2731-1,4	1990年度調査	1991年度報告	市報262集
第4次調査	東区箱崎1丁目2761	1989年度調査	1991年度報告	年報vol.4
第5次調査	東区箱崎1丁目25,27	1991年度調査	1992年度報告	市報273集
第6次調査	東区箱崎3丁目8-31	1994年度調査	1996年度報告	市報459集
第7次調査	東区箱崎1丁目2711外	1994年度調査	1996年度報告	市報459集
第8次調査	東区箱崎1丁目11-21	1996年度調査	整理中	
第9次調査	東区箱崎1丁目1935-1	1996年度調査	(本報告)	
第10次調査	東区箱崎3丁目地内	1996年度調査	1998年度報告	
第11次調査	東区箱崎3丁目3264-3	1997年度調査	整理中	
第12次調査	東区箱崎1丁目2603-3-1	1997年度調査	整理中	
第13次調査	東区馬出5丁目520,521	1997年度調査	整理中	

箱崎遺跡群を語るにあたって菖崎宮は重要な存在であろう。菖崎宮は921年（延喜21年）に大宰府觀世音寺の巫女であった橘滋子に八幡大菩薩の託宣があり、二年後の923年（延長3年）に德波郡の大分宮を遷座し創建したものと伝えられている。異賊降伏を祈願して北面して建立され菖崎宮であるが、13世紀代には二度にわたる元寇によって焼失している。このことは各調査地点においても土層中における焼上層として観察されている。創建当時に近い遺構は2次調査で10世紀後半頃の溝が検出されている程度で、11世紀代後半から遺構が散漫に見られるようになる。菖崎宮周辺から遺跡群の中央にかけては12世紀後半に一時的にではあるが遺構は減少することが過去の調査から明らかになっている。各調査地点により時代毎の遺構数の増減の傾向は異なるが、14世紀末から15世紀頃以降については各調査地点においても遺構が検出されている。高速鉄道建設に伴う1次調査においては該期から定形化した集落が遺跡範囲内に形成されはじめるという所見が述べられている。各調査成果から考へても14世紀代以前の散漫な遺構の分布に対して、それ以後では明確な占用区分が存在し、その町割が現代の町並みの中に痕跡を残していることがわかる。近世以降の遺構はどの調査地点においても検出されており、遺物も大量に出土している。現在の菖崎宮は1546年（天文15年）に大友義隆によって再建されたものである。



4. 調査の記録

(一) 概要

第9次調査地点では、開発中諸面積 219.53m² のうち、191.71m²について発掘調査を行なった。調査地点は現在の哲崎宮境内の南側に隣接し、県道堅粕妙見線に面している。南側約 40 m 地点は福岡県教育委員会調査の2次調査地点であり、福岡市文化財分布地図上では箱崎遺跡群の東南端部付近に位置している。調査は現地表面から 1.3 m ~ 1.7 m ほどの整地層を除去した褐色砂層面を造構面として設定し行なった。調査地点は箱崎遺跡群の占地する砂丘の東南端部に位置し、宇美川が西側に大きく蛇行している箇所の延長線上に当たることから造構面の褐色砂層は宇美川の堆積砂と考えられる。造構面は一面のみで過去の調査成果から比較すると造構の密度は低いものの、中世から近世にかけての井戸、土塹などの遺構が検出された。調査に先行して基礎工事が一部行なわれていたが、それ以外の擾乱は造構面にはほとんどなく、造構の遺存状態は良好であった。出土遺物は総量でコンテナ 12 箱である。遺物は土師器、中国陶磁器、瓦器、貨幣、瓦、石錠などの滑石製品などがある。今回の報告では遺物の出土量の多かった遺構を中心に報告する。

(二) 検出遺構

検出した遺構は井戸 12 基、土塙、溝一条、その他建物としてまとめきれない柱穴群がある。個別の遺構図を掲載していない遺構については第3図の遺構配置図を参照されたい。

S E - 01 (第4図)

調査区中央部北側で検出した。西側を基礎工事で欠くが、ほぼ円形を呈する井戸である。掘方の径は 1.75 m を測る。検出面からの深さは 1.9 m を測る。掘方中央に、径の異なる木桶を二重に重ね井戸枠としている。上段の木桶は半分のみ遺存しており、板材は現存で幅 4cm、厚さ約 1cm、高さ 20cm を測る。下段の木桶は下方に向かって広がっており、底を抜いて据えられている。板材は幅約 3cm、厚さ約 1cm、高さ 50cm を測る。出土遺物は土師器、青磁、白磁、瓦器等がある。出土遺物から 12 世紀後半頃に比定できる。

S E - 04

調査区北東部隅で検出した。北半分は調査区外になり、西側は S E - 03 に切られ全容は把握できない。遺物から 11 世紀後半頃に比定できる。

S E - 06 (第4図)

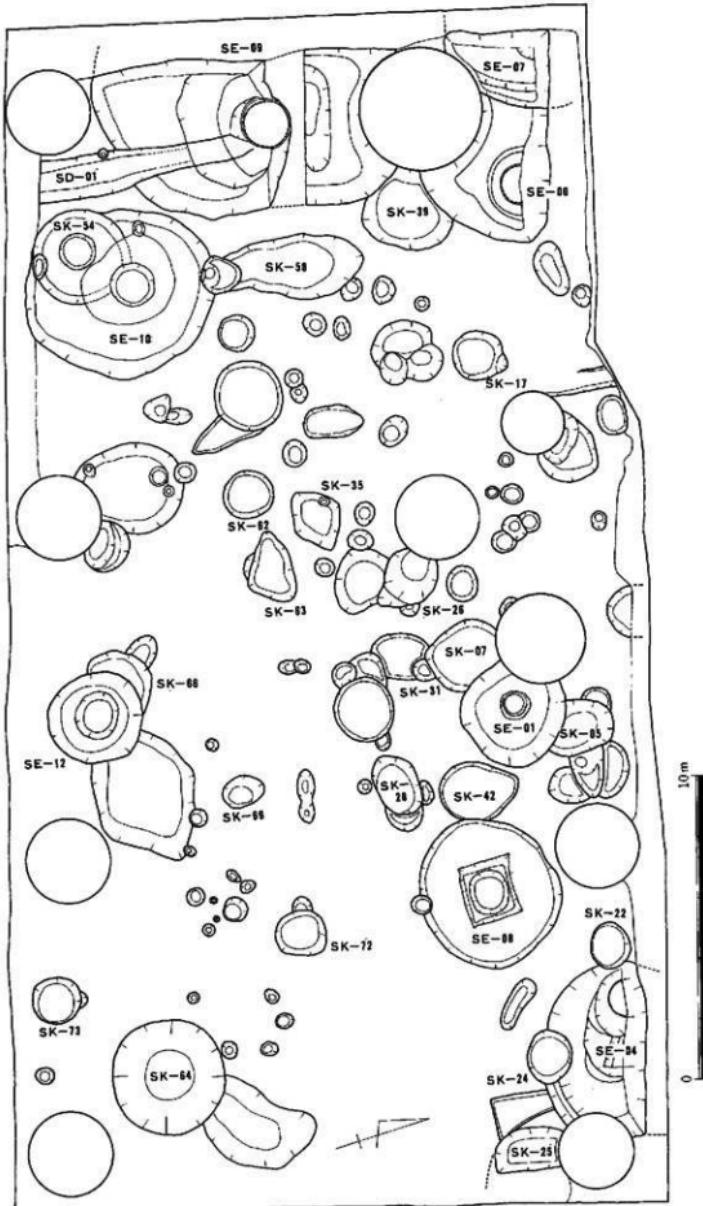
調査区の北西端部で検出した。西側を S E - 07 に、南側を掘削に切られ、北側半分は調査区外に出るため掘方の径は不明である。検出面からの深さは 1.9 m を測り、標高 73cm で湧水する。井戸枠はおそらく中央に据えられていたと考えられるが正確な位置関係は不明である。板材は下方が腐食し全体は遺存していないが、現存で幅約 3cm、厚さ約 1cm を測る。出土遺物は土師器、瓦器、中国製磁器などがある。遺物より 13 世紀前半の時期を考えるのが妥当と思われる。

S E - 07 (第4図)

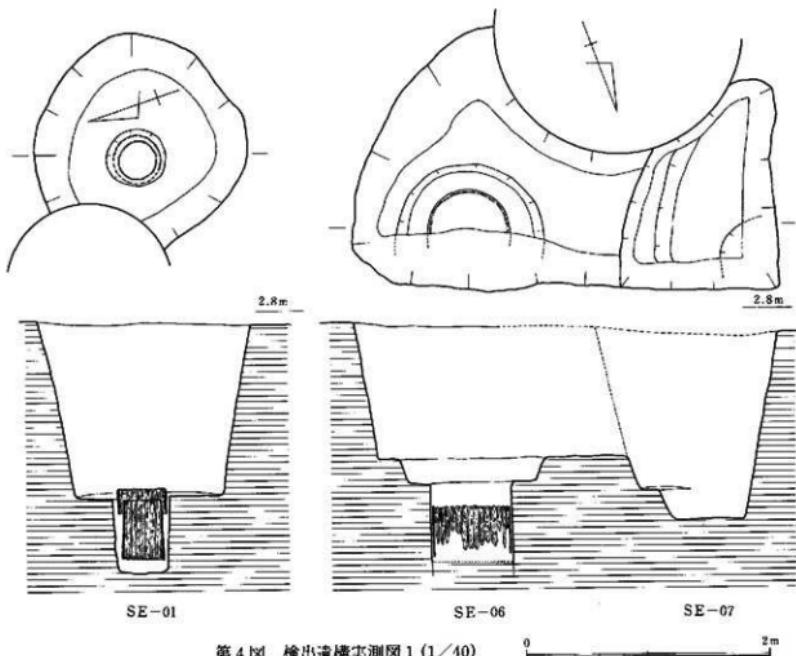
調査区北西隅で検出した。調査区には掘方の一部がかかるだけで大部分は調査区外である。主な出土遺物は土師器、中国製磁器であるが、S E - 06 を切り込む形で掘られており、その年代を遡ることはないので、13 世紀終わり頃から 14 世紀前半の時期が考えられる。

S E - 08 (第5図)

調査区北東部で検出した。掘方の径は 2.3 ~ 2.5 m で東西方向にやや伸びた梢円形を呈している。



第3図 造構配置図(1/80)



第4図 検出遺構実測図1(1/40)

0 2m

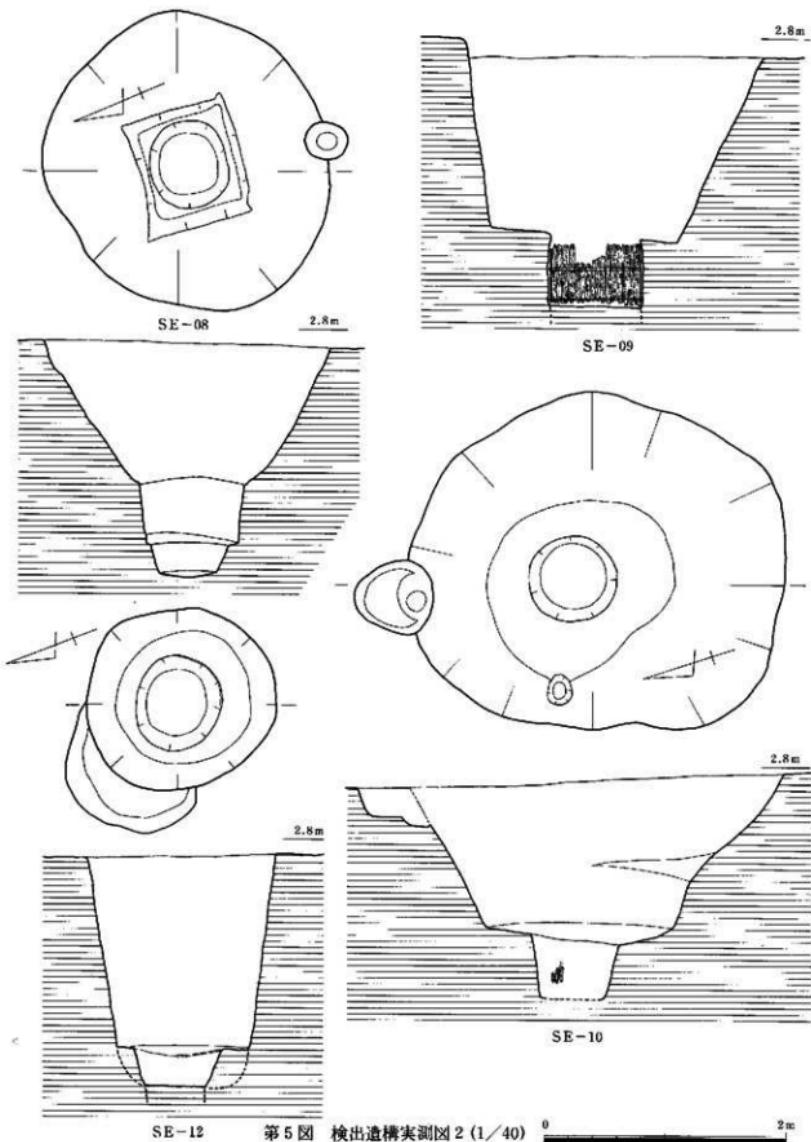
検出面から深さ1.1mのところで1m×90cmの方形の井戸枠を、1.7mの深さで径70cmの円形の井戸枠を検出したが、板材は全て腐食し遺存していなかった。出土遺物は土師器、瓦器、瓦、白磁器、高麗青磁器等が出土している。遺物から11世紀中頃から後半の時期が考えられる。

S E - 09 (第5図)

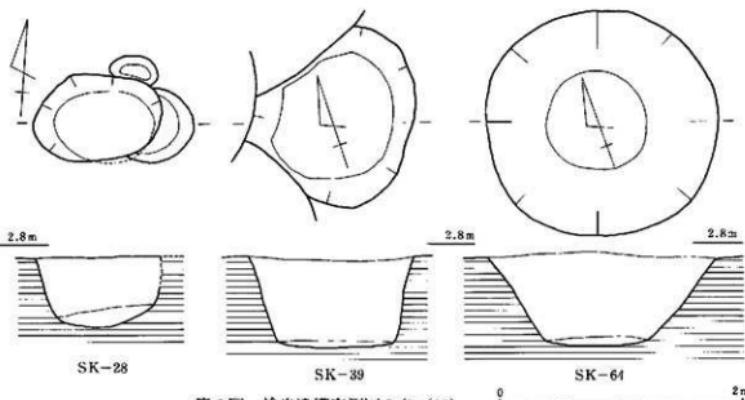
調査区西端の中央部で検出した。擾乱に切られ一部は調査区外になるため、全掘はしていない。検出面から深さ1.5mのところで木桶の井戸枠を検出した。一部腐食が進み木質はスponジ状になっていたが、現存で幅4cm、厚さ1cmを測り、外面に二条のタガが巡る。井戸枠内には瓦等の遺物が大量に廃棄されていた。出土遺物は土師器、中国製磁器、陶器、瓦等をはじめとして比較的多く出土している。遺物のはとんどが、埋め戻されるときに混入したもので遺構の時期を比定できるものは限られるが、15世紀前半頃のものと考えられる。

S E - 10 (第5図)

調査区南西側、S E - 09の南東側で検出した。掘方は径約3mの円形を呈する。検出面から深さ1.5mのところで径70cmの井戸枠を検出した。木桶を転用したものであるが木材は一部残存だけである。現存で幅3cmを測る。出土遺物は土師器、瓦器、瓦、中国製磁器、石鍋等を主として大量に出土した。遺物から13世紀代の時期が考えられる。



第5図 検出構造実測図 2 (1/40)



第6図 検出遺構実測図3(1/40)

SE-12(第5図)

調査区南側中央部で検出した。掘方は径1.5mの円形を呈す。掘方の中央部、深さ1.5mのところで井戸枠を検出した。曲物を転用したもので木質が一部残存していた。主な出土遺物は土師器、白磁器である。この遺構の年代は遺物から12世紀前半頃が考えられる。

SK-28(第6図)

調査区の中央部のやや東側のSE-08の南西側で検出した。平面形は長径が1m、短径が70cmの楕円形を呈し、深さは検出面より約60cmを測る。遺物は土師器、瓦器、白磁器が出土した。遺物から12世紀前半頃の年代が考えられる。

SK-39(第6図)

調査区の西側、SE-06の南側で検出した。一部他の遺構と擾乱に切られてはいるが、平面形は径1.5m前後の不整円形を呈する。検出面から深さ70cmを測る。遺物は土師器、中国製磁器等が出土した。これらの遺物から12世紀後半頃の年代が考えられる。

SK-64(第6図)

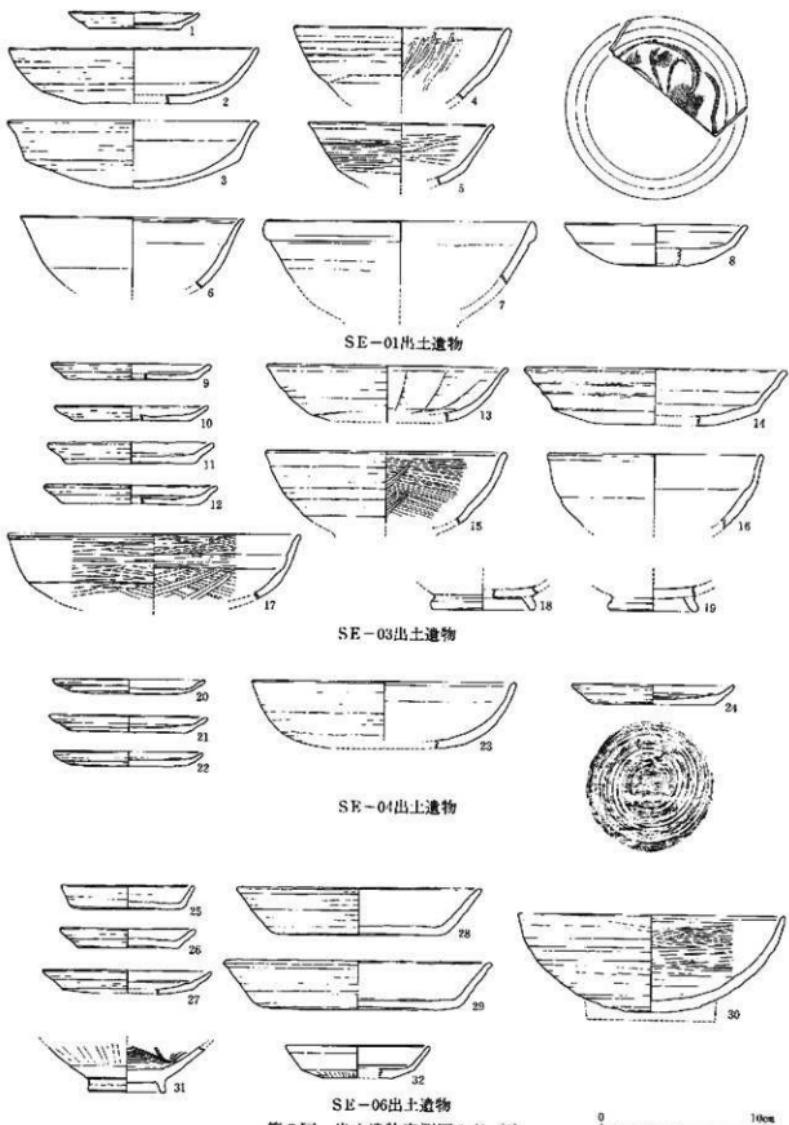
調査区の南東部で検出した。平面形は径1.9mの円形で掘り鉢状の断面形を呈する。検出面からの深さは約70cmを測る。遺物は比較的多く、土師器、瓦器、白磁器等が出土した。この遺構の時期は遺物より11~12世紀代が考えられる。

SD-01

調査区の南西側、SE-09の上面で検出した。ほぼ南北方向に伸びるが調査区北側では他の遺構に切られ検出できなかった。幅40cm、深さは検出面から約40cmを測る。この溝の主軸方向は底部付近でN-10°-Eである。遺物の出土はほとんどなかったが、SE-09との関係から15世紀後半頃の時期が考えられる。

(三) 出土遺物

遺物はコンテナ12箱分が出土した。主に井戸や比較的出土量の多い遺構の遺物を図化した。



第7図 出土遺物実測図1 (1/3)

0 10cm

S E - 01 (第7図 1~8)

1は土師器の皿である。復元口径8.0cm 器高1.0cmを測る。底部は回転糸切りで板目圧痕が見られる。2、3は土師器の壺である。2は径15.4cm 器高3.4cmで底部は覗切り、3は径15.4cm 器高4.1cmを測り、底部は覗切りで板目圧痕が見られる。4は瓦器椀である。径は13.2cmを測る。幅4mmの覗磨きが外器面では横方向に、内器面では縦方向に施されている。5は土師器の椀である。径は11.4cmを測る。6、7は山盛器の椀である。6は復元径13.8cmを測り、口縁部は端部で外反し内面上部に一条の沈線を巡らす。高台部は欠損する。7は復元径16.2cmで、口縁部は玉縁状を呈する。8は龍泉窯系の青磁の皿である。復元径11.2cm、器高は2.6cmを測る。見込に櫛描と片切形で文様を施す。遺物よりこの遺構の年代は12世紀代後半頃の年代が考えられる。

S E - 03 (第7図 9~19)

9~12は土師器の皿である。法量を列挙すると、9は復元径9.8cm 器高1.0cm、10は径9.4cm 器高9mm、11は径10.2cm 器高1.3cm、12は復元径10.6cm 器高1.2cmを測る。9、10、11、12すべて覗切り底で10には板目が見られる。13、14は土師器の壺である。13は復元径14.8cm 器高3.4cmを測り、内器面にはコテアテ成形痕が見られる。14は径16.1cm 器高3.4cmを測り、内外面ともに横位方向の指ナデ痕が見られる。ともに底部は覗切りである。15は土師器の椀である。押し出し技法で成形され、外面は横位の覗磨きが施されていたようだが磨耗しており明瞭ではない。内面は斜めに交差するように施された覗磨き痕が残る。法量は復元径14.8cmを測る。16は瓦器椀である。復元径は13.2cmを測り、肩輪のためか明瞭な器面調整は見られない。17は黒色土器碗である。内外面とも漆黒色を呈するB類である。法量は径18.0cmを測る。内外面とも丁寧な覗磨きが施されている。18、19は土師器の高台付椀の高台部である。高台部径は6.4cm、5.6cmを測る。これらの遺物は井戸の覆土から出土したが、この遺構自体は近代以降のものであり、遺構の年代を示すものではないが遺物は11世紀代のものであろう。

S E - 04 (第7図 20~24)

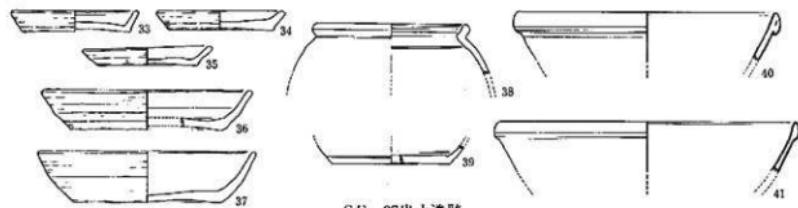
20~22、24は土師器の皿である。20は復元径9.4cm 器高9mm。21は径9.8cm 器高1.0cm。22は復元径9.2cm 器高9mmを測る。24は径10.0cm 器高1.2cmを測る。すべて覗切りの底部をもつ。23は土師器の壺である。押出し技法で成形し内面にはコテアテ調整を施し、外面底部付近には指頭痕が見られる。復元径16.2cm 器高4.1cmを測る。遺物から11世紀前半から中頃の時代が考えられる。S E - 03の遺物も本米S E - 04の覆土に包含されていたものと考えられる。

S E - 06 (第7図 25~32)

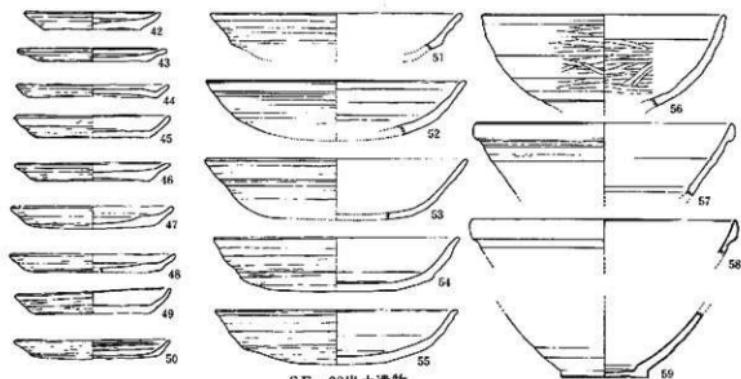
25~27は土師器の皿である。法量はそれぞれに、25が復元径8.2cm 器高1.5cm、26が復元径8.4cm 器高1.2cm、27が復元径10.4cm 器高1.4cmを測る。25、26は糸切りの底部をもつが、27は覗切りの底部をもつ。28、29は土師器壺である。28は復元径15.0cm 器高2.9cmを測り、29は復元径16.4cm 器高3.0cmを測る。ともに底部は糸切りで板目圧痕が見られる。30は瓦器椀である。復元径は16.4cmを測る。高台部は貼り付けた接着箇所から剥落している。31は青磁碗である。同安窯系のもので高台部径は4.6cmを測る。見込の周囲に一条の巻線が巡る。周囲には片切形で文様を施す。釉薬は高台中位まで施され疊付は露胎である。32は青磁皿である。復元径は8.8cm 器高は2.0cmを測る。これらの遺物は13世紀前半代に属するものと考えられる。

S E - 07 (第8図 33~41)

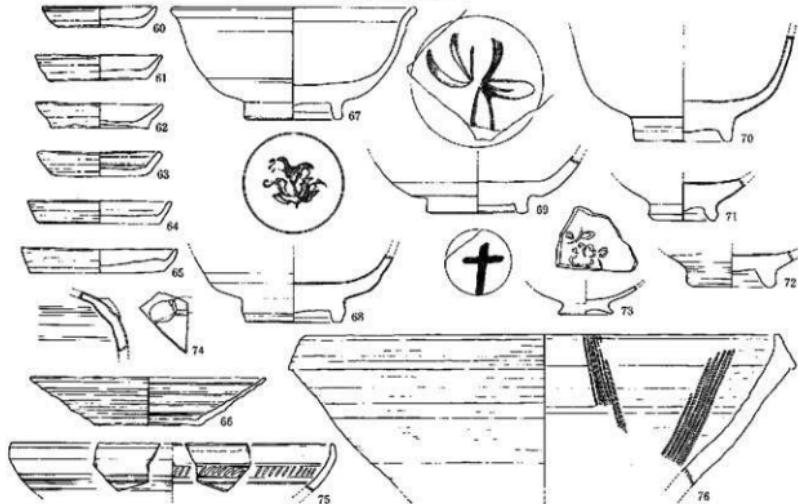
33~35は土師器皿である。33は復元径7.8cm、器高1.3cm。34は復元径8.0cm、器高1.2cm。35は復元径8.0cm、器高1.2cmを測る。それぞれ底部は糸切りである。36、37は土師器の壺である。法量



SE-07出土遺物



SE-08出土遺物



SE-09出土遺物

第8図 出土遺物実測図2(1/3)

0 10cm

は36が復元径13.0cm、器高2.4cm、37が復元径13.4cm、器高3.1cmを測り、底部はともに糸切りである。38は白磁の壺の口縁部片である。復元径は9.6cmを測る。39は白磁の皿である。底径は7.2cmで底部は露胎である。40、41は白磁の碗である。ともに玉縁状凹縁をもち、復元径は18.2cm、15.8cmを測る。遺物からこの造構の年代は11世紀中頃を考えて大過ないものと思われる。

S E - 08 (第8図 42 ~ 60)

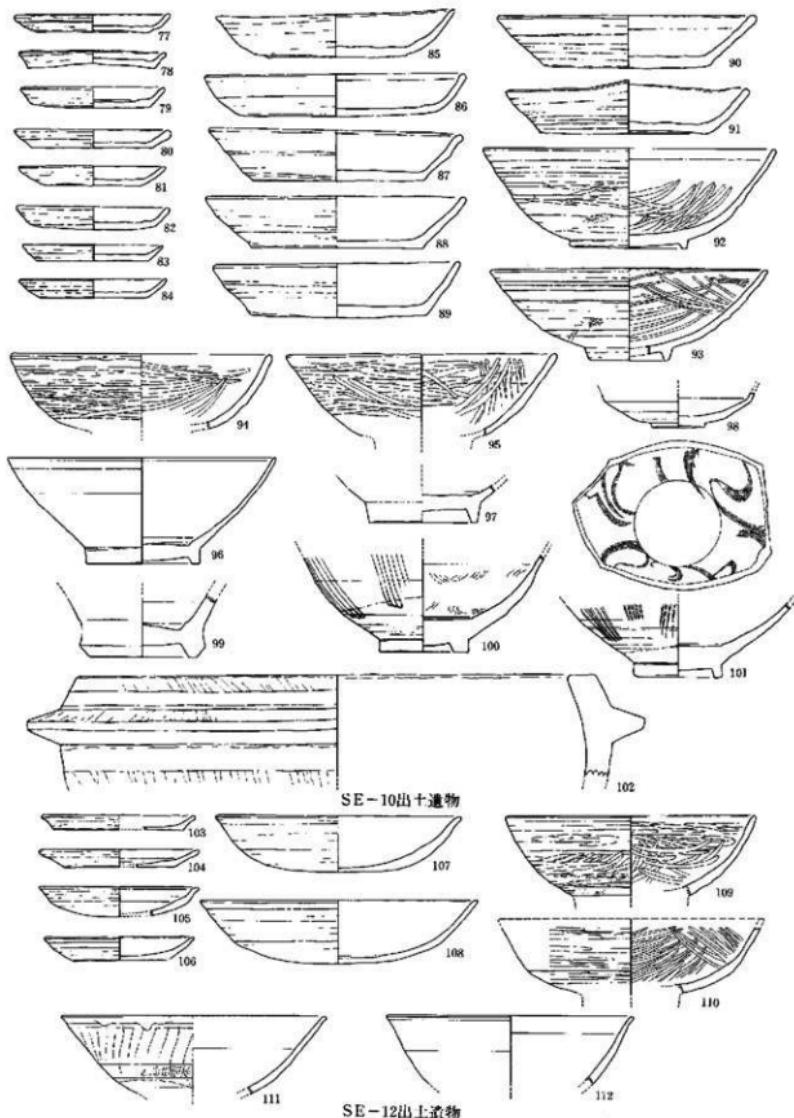
42 ~ 50は土師器皿である。法量を列挙すると42が復元径8.4cm器高1.1cm。43が復元径9.2cm器高8mm。44が復元径9.4cm器高8mm。45が径9.6cm器高1.4cm。46が復元径9.6cm器高1.1cm。47が復元径10.0cm、器高1.4cm。48が復元径10.2cm器高1.1cm。49が復元径9.6cm器高1.5cm。50が復元径9.6cm器高1.2cmを測る。底部は全て範切りで43、44には板目圧痕が見られる。51 ~ 55は土師器坏である。口径、器高を順に挙げると51が15.4cm、2.2cm、52が16.0cm、3.3cm、53が16.2cm、3.7cm、54が15.0cm、3.3cm、55が14.8cm、3.3cmを測る。56は瓦器碗である。復元径15.0cmを測る。内外面とも範磨きを施す。57、58は白磁碗である。復元径はそれぞれ16.1cm、16.5cmを測る。ともに口縁部は正様状を呈する。57は体部に屈曲をもつ。59は高麗青磁碗である。高台部復元径は5.2cmを測る。唇付は釉薬が削り取られ露胎となっている。遺物から11世紀代中頃から後半にかけての時代を考えている。

S E - 09 (第8図 60 ~ 76)

60 ~ 65は土師器の皿である。底部は全て糸切りで、法量はそれぞれ60が径7.0cm、器高1.3cm、61が径7.8cm、器高1.6cm、62が径7.8cm、器高1.5cm、63が径7.6cm、器高1.6cm、64が径8.8cm、器高1.4cm、65が径9.6cm、器高1.6cmを測る。66は土師器の坏である。復元径は14.4cm、器高2.9cmを測る。器壁は薄く焼成もよく、底部は糸切りで色調は淡赤褐色を呈する。大内氏系の土器と考えられる。67 ~ 71は龍泉窯系の青磁碗である。67は径15.3cm器高6.85cmを測る。高台内ののみ露胎で全面に施釉し、見込にはスタンプによる文様があるが明瞭ではない。68は高台部径5.8cmを測り、見込に印花紋が施されている。高台内の釉を削り取り中心部のみ施釉が残る。69は見込に片切形による施紋をもち、高台内に「十」字形の墨書きをもつ。施釉は外底部まで疊付から高台内は露胎となる。70は見込にスタンプによる印花紋が施されており、高台径6.0cmを測る。68と同じく高台内の外周部以外は全面に施釉してある。71は高台部片で高台径は3.8cmを測り、施釉は外底部上まで残りは露胎となる。72は同安窯系の青磁碗高台片である。外面は露胎で内面のみ施釉されている。73は青磁の高台付皿の底部片である。見込内にはスタンプによる印花紋が施されている。底径は3.4cmを測る。74は白磁の四耳壺である。75は李朝陶器の鉢である。復元径は19.8cmを測り、淡灰色の釉調を呈し白色釉で施紋する。76は備前焼の捏ね鉢である。復元径は41.0cmを測り、内面に6本単位の条線を施す。

S E - 10 (第9図 77 ~ 102)

77 ~ 84は土師器の皿である。すべて糸切りの底部をもち、79以外は板目圧痕が見られる。法量を順に列挙すると、77は径9.6cm、器高1.2cm、78は径9.0cm、器高1.1cm、79は径8.8cm、器高1.3cm、80は径9.6cm、器高1.1cm、81は径9.0cm、器高1.2cm、82は径9.4cm、器高1.3cm、83は径8.6cm、器高1.1cm、84は径9.0cm、器高1.2cmを測る。85 ~ 91は土師器の坏である。底部はすべて糸切りで86、87、90、91には板目圧痕が見られる。法量は85が径14.6cm、器高2.9cm、86が径16.0cm、器高3.1cm、87が径15.6cm、器高3.3cm、88が径16.0cm、器高3.2cm、89が径15.2cm、器高3.5cm、90が径15.9cm、器高3.3cm、91が径15.0cm、器高3.3cmを測る。内器面の調査にはコテアテ、ナデが用いられている。92 ~ 95は瓦器碗である。法量はそれぞれ92が復元径18.0cm、器高6.2cm、93が復元径17.0cm、器高5.6cm、94が復元径16.6cm、95が復元径16.0cmを測る。主に外面のミガキは横位に、



第9図 出土遺物実測図3 (1/3)

内面のミガキは斜格子状に施されている。ミガキの単位は2mmから3mmのものが多い。器形、調整から筑前型瓦器の範疇に入るものと考えられる。96は白磁の高台付皿である。高台部は削りだしによって作り出され底部は斂切りされている。施釉は体部中程までとし残りは露胎となる。97、98は白磁の碗である。97は薄手の作りで復元径16.4cm、器高6.5cmを測る。やや浅い屈曲はあるがほぼ直線的に立ち上がる体部をもつ。体部中程より下は露胎となる。98は白磁碗の高台部で底径6.6cmを測る。施釉は体部までで高台部は露胎となる。99は白磁蓋の底部片である。底径は4.0cmを測り、外底部、高台内ともに露胎とする。100、101は同安窯系の青磁碗である。高台部径は100が5.4cm、101が5.6cmを測る。ともに外面に兔状工具による条線文、内面に片切影と梅描による文様を施す。施釉はともに体部中位まで残りは露胎とする。102は滑石製石鍋である。鉢部の復元径は38cmを測る。鉢上部と体部にはノミの打撃加工痕が明瞭に残り、下部には煤の付着が見られる。以上の遺物からは13世紀代の年代が考えられる。

S E - 12 (第9図 103 ~ 112)

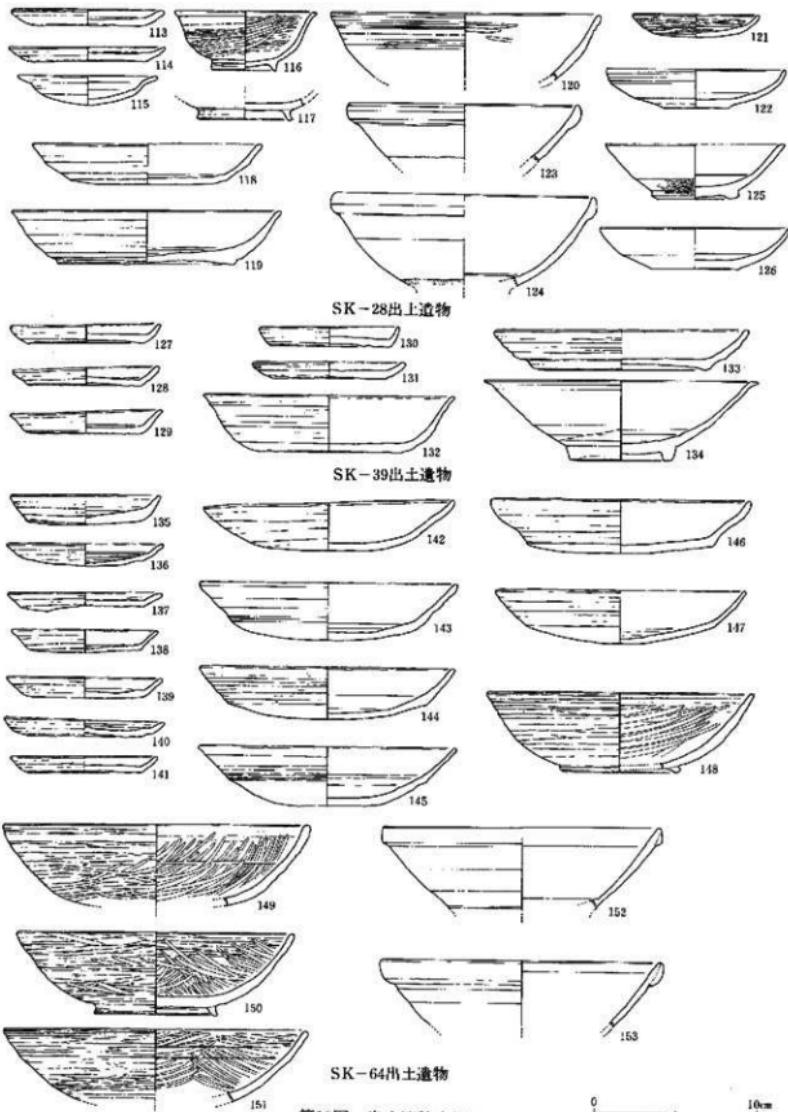
103~106は土師器皿である。103、104は糸切りの底部、105、106は斂切りの底部をもつ。法量は順に径9.4cm 器高9mm、径9.8cm 器高1.1cm、径9.8cm 器高1.9cm、径9.2cm 器高1.5cmを測る。105は押し出し技法により丸みを帯びた底部をもつ。107、108は土師器壺である。107は復元径15.0cm 器高3.5cm、108は復元径17.0cm 器高3.9cmを測り、ともに底部は斂切りである。押し出し技法で成形した後コテアテ調整を施している。109は土師器碗である。高台部は欠損しているが、径14.8cmを測り内外面ともミガキが施してある。110は黒色土器である。内面のみが漆黒色を呈する黒色土器A類である。外面のミガキは横位に、内面のミガキは全周の3分の1の単位で斜格子状に施されている。111、112は白磁碗である。復元径は111が16.2cm、112が15.2cmを測る。111は直線的な体部とわずかに外反する口縁をもち、施釉は体部中位までとする。また外面には兔状工具の突端部による条線文が施されている。112は火災等の原因で被熱し釉が融け落ちている。この遺構の年代は遺物から12世紀代前半を考えて人過ないものと思われる。

S K - 28 (第10図 113 ~ 125)

113~115は土師器皿である。115は押し出し技法で成形されているが底部はすべて斂切りで114、115には板目圧痕が見られる。法量は113が復元径9.4cm 器高1.0cm、114が復元径9.6cm 器高9mm、115が復元径8.6cm 器高1.8cmを測る。116は土師器碗である。径8.8cm 器高3.7cmを測り、内外面とも丁寧なミガキが施される。色調は明褐色を呈し焼成も良い。118、119は土師器壺である。118は復元径14.2cm 器高2.5cmを測り、斂切りの底部をもつ。119は復元径16.6cm 器高3.3cmを測り、底部は糸切りで板目圧痕をもつ。117は黒色土器碗底部片である。内外面とも漆黒色を呈するB類であるが詳しい器面調整は不明である。120は瓦器壺である。復元径16.6cmを測り、器面の一部が銀化する。磨き痕はあまり明瞭ではなく口縁部付近のみ観察できる。121は瓦器の皿である。径7.8cm 器高1.4cmを測り、底部は斂切りされている。内外面ともに幅2mm程度の横位の磨き痕が残り、外面の一部は銀化している。122、126は白磁皿である。各々径11.0cm 器高2.4cm、径11.6cm 器高2.6cmを測る。122は内反する口縁部をもち、外底部上部まで施釉されている。126は底部のみ露胎となる。123、124は白磁碗である。ともに玉縁状口縁をもち、復元径は14.4cm、16.4cmを測る。125は白磁の高台付皿である。体部下半部まで施釉され、径は11.0cm 器高3.4cmを測る。遺物から12世紀代前半の年代が考えられる。

S K - 39 (第10図 127 ~ 134)

127~131は土師器皿である。全て糸切りの底部をもち、131以外には板目圧痕が見られる。法量は



第10図 出土遺物実測図 4 (1/3)

0 10cm

各々径 9.2cm 器高 1.1cm、径 9.0cm 器高 1.3cm、径 9.3cm 器高 1.5cm、径 8.6cm 器高 1.3cm、径 9.4cm 器高 1.0cm を測る。132、133 は土師器坏である。共に糸切りの底部で板目压痕が見られる。それぞれ径 15.4cm 器高 3.5cm、径 15.6cm 器高 2.5cm を測る。134 は白磁碗である。薄手の作りで径 16.8cm 器高 4.9cm を測る。高台部上まで施釉し、あとは露胎とする。これらの遺物から 12 世紀後半頃の年代が考えられる。

S K - 64 (第 10 図 135 ~ 153)

135 ~ 141 は土師器皿である。各法量を列挙すると 135 が径 9.2cm 器高 1.8cm、136 が径 9.6cm 器高 1.4cm、137 が径 9.5cm 器高 1.3cm、138 が径 9.0cm 器高 1.6cm、139 が径 9.6cm 器高 1.3cm、140 が径 9.8cm 器高 1.1cm、141 が径 9.0cm 器高 1.0cm を測る。また底部は 135 から 139 までが糸切りで 140、141 は糸切りの底部をもつ。板目压痕はすべてに見られる。142 ~ 147 は土師器坏である。143 だけが糸切りの底部をもちあとは挽切りの底部をもつ。また 142、143、144、146 の底部には板目压痕が見られる。法量を列挙すると径 15.4cm 器高 3.3cm、径 15.8cm 器高 3.5cm、径 15.6cm 器高 3.2cm、径 15.8cm 器高 3.6cm、径 16.0cm 器高 3.3cm、径 15.4cm 器高 3.3cm を測る。148 は土師器碗である。復元径は 16.4cm 器高 4.9cm を測る。体部は押出し技法で成形したのちコテアテ調整を施し、高台部を貼り付けている。外面に粗いミガキを、内面には丁寧なミガキを施す。149 ~ 151 は瓦器碗である。法量は 149 が復元径 18.8cm、150 が復元径 17.0cm 器高 5.0cm、151 が復元径 18.6cm を測る。149 は他と比べ厚い口縁をもち、体部にやや丸みをもつ。いずれも内面には丁寧なミガキが施されている。152、153 は白磁碗である。ともに玉縁状口縁をもち復元径はそれぞれ 17.6cm、17.0cm を測る。これらの遺物から S K - 64 の年代は 11 世紀代から 12 世紀代中頃が考えられる。

その他遺構出土の遺物 (第 11 図)

S K - 07 (154 ~ 159)

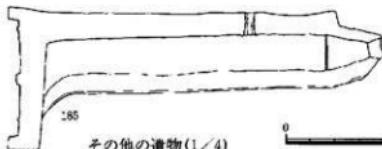
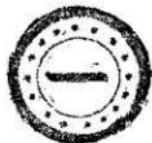
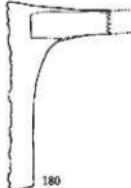
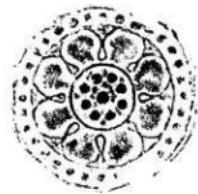
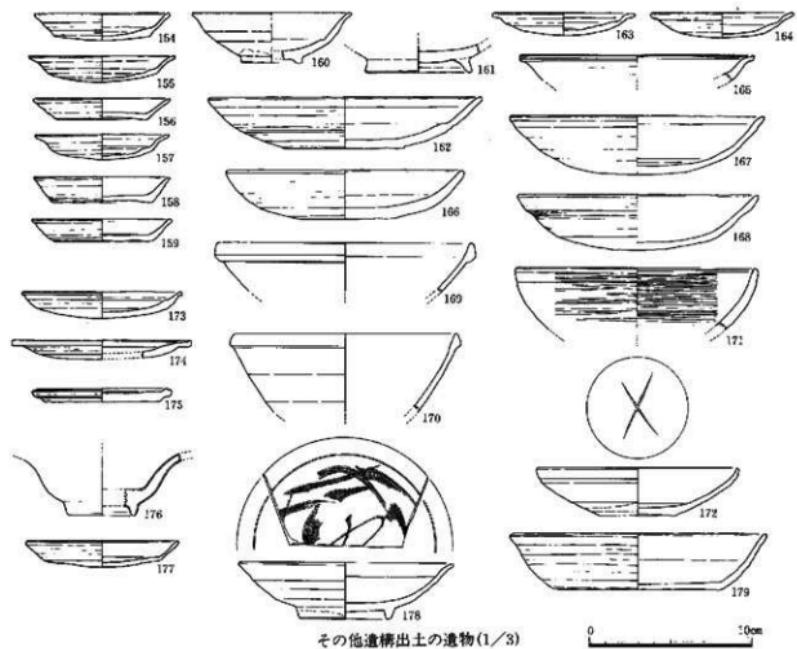
154 ~ 159 は土師器皿である。緩やかに外反する口縁をもち、底部は全て挽切りで板目压痕をもつ。法量を各々列挙すると径 8.4cm 器高 1.7cm、径 9.0cm 器高 1.6cm、径 8.4cm 器高 1.3cm、径 8.2cm 器高 1.6cm、径 8.4cm 器高 1.6cm、径 8.6cm 器高 1.4cm を測る。この他に瓦器、白磁、瓦等が出土したが紙面の都合で割愛する。遺物より 11 世紀後半の年代が考えられる。

S K - 17 (160 ~ 162)

160 は白磁の高台付皿である。復元径 9.8cm 器高 3.1cm を測り、削り出しの高台部は露胎となる。高台部径は 3.6cm を測る。161 は瓦器碗である。挽切りの後粘土壁を貼り付け成形し高台部とする。高台部径は 6.4cm を測る。162 は土師器坏である。復元径は 16.8cm 器高 3.1cm を測り、底部は挽切りとする。この他高麗陶磁器片が数点出土している。これらの遺物から 11 世紀後半の年代が考えられる。

S K - 22 (163 ~ 172)

163、164 は土師器皿である。底部は共に糸切りで板目压痕を有する。法量は 163 が径 8.8cm 器高 1.4cm、164 が径 8.8cm 器高 1.5cm を測る。165 ~ 168 は土師器の坏である。165 は復元径 14.4cm を測る。口縁部は大きく外反したあと折り返し口端部を立てる。166、167、168 は挽切りの底部をもち、法量はそれぞれ復元径 14.6cm 器高 3.0cm、復元径 15.6cm 器高 3.6cm、復元径 14.8cm 器高 3.4cm を測る。167 は底部に板目压痕をもつ。169、170 は白磁碗である。どちらも玉縁状口縁をもち、復元径は 16.0cm、14.2cm を測る。171 は柿葉型瓦器碗である。復元径は 14.9cm を測り、口唇部下に沈線が巡る。外面軽くミガキが施されているのに対し内面はミガキが密に施されている。172 は白磁皿である。径 12.4cm 器高 2.9cm を測る。わずかに内反する口縁をもち、体部下半まで施釉される。見込には「×」状の切り込みが片切形で施されている。遺物からこの遺構の年代は 11 世紀後半から 12 世紀初頭頃が考え



0 20cm

第11図 出土遺物実測図 5 (1/3, 1/4)

られる。

S K - 26 · S K - 31 · S K - 37 (173 ~ 175)

173 は S K - 26 から出土した土師器の小皿である。復元径 9.8cm 器高 1.6cm を測り、底部は観切りしナデ施す。口端部は指ナデで押しつぶし面取りしている。174 は S K - 31 から出土した土師器小皿である。復元径は 11.0cm 器高 1.2cm を測り、底部は観切りとする。口縁部は大きく外反し平坦面をつくり、観ナデによって面取りしている。器形から蓋とも考えられるが身とした。175 は S K - 37 から出土した土師器小皿である。復元径は 8.6cm 器高 8mm を測り、底部は観切りとする。口端部には箆状工具突端部で 2 条の沈線が施されている。これらの遺物は時期を決定できる遺物が共伴して出土していないが、器形、調整より 11 世紀後半から 12 世紀前半の年代と思われる。

S K - 35 (179)

179 は土師器皿である。径 15.8cm 器高 3.4cm を測る。底部は観切りで板目圧痕を有する。

S K - 58 (176)

176 は青磁碗である。いわゆる龍泉窯系のもので高台部径は 4.0cm を測る。

S K - 62 (177)

177 は土師器皿である。径 9.4cm 器高 1.6cm を測る。底部は観切りで淡赤褐色を呈する。178 は白磁の高台付皿である。復元径 15.2cm 器高 3.4cm を測る。高台部中位まで施釉しあとは露胎とする。見込には櫛描と片切影により文様を施す。この他青磁、高麗陶磁器が出土している。遺物より 12 世紀代前半頃の年代が考えられる。

その他の遺物 瓦 (第 11 図)

180 ~ 184 は S E - 10 から出土したもので 185 は S E - 09 から出土した。180 は軒丸瓦で径 15.3cm を測る。胎土は緻密で焼成は良好で淡茶褐色を呈する。1 + 8 の中房に、単弁 8 弁の蓮花文と外区に 32 個の珠文をもつ。とともに 8 分割を基本とした文様構成をもっている。181 も軒丸瓦である。内区内に菊花状の花文と複数の枝葉が表現しており、外区と内区との間には凸線で界線をめぐらしてある。また内区の菊化の弁端が珠文状に配置している。13 世紀代のものと考えられる。182 は軒平瓦である。淡赤褐色に焼成し、胎土は緻密であり、短い段頸をもつ。上区、内区、下区と三区分され上下区には珠文を配し珠文帯としている。内区には上下互い違いに花文を配している。183 はやや小型の軒平瓦である。平瓦を製作する桶に粘土を巻き付けた状態で、回転台を利用して瓦当まで一緒に製作したものである。瓦当面は三条の突線文状の弧文の中央の一条を左上方向から刺突し、右方向から左方向へと流れる波状文とする。また頭部にも布を巻き付けた指頭圧痕で波状の文様を構成している。181 と同じく 13 世紀代のものと考えられる。

184 は軒平瓦である。脇区を広く開けた均整唐草文が瓦当面に配されている。

瓦当面の幅、高さとも小さく、胎土は粒子が粗く焼成も良くない。16 世紀代として考えて人過ないと思われる。185 は軒丸瓦である。瓦当面の径は 11.7cm を測る。外区に高い素文線をもち、その内側に 16 個の珠文を配す。内区には「一」の文字が施されている。焼成は良好で灰褐色を呈し胎土も緻密である。



第 12 図 出土遺物実測図 6 (1/1)

銅錢（第12図）

9次調査では計3枚の銅錢が出土した。186、187はどちらも「元豊通寶」で、ともにSE-09から出土した。元豊通寶の初鑄年は1078年（元豊元年）であり、北宋のものである。残り1枚は遺存状態が悪いが、「皇宋通寶」の鑄銘が読める。皇宋通寶の初鑄年は1038年（寶元2年）で、北宋時代のものである。

（四）小結

以上調査の所見について述べてきたが、以下では今回の調査の成果をまとめてみたい。

箱崎遺跡第9次調査は面積190m²と狭い範囲の調査ではあった。調査着手前には調査地点が現在の菅崎宮境内に隣接していることから、菅崎宮創建当時（10世紀半ば頃）の遺構の検出が予想されていたが、該期の遺構は残念ながら検出されなかった。検出した遺構は井戸、土壙、建物としてまとめきれないピット群で他の調査地点と同様に集落関係の遺構が中心であった。これまでの調査成果から箱崎遺跡内では11世紀後半から建物等の遺構がみられはじめ、菅崎宮周辺から遺跡の中央部にかけては12世紀後半代に遺構が減少し、13世紀後半頃から再び増加しはじめ、14世紀末から15世紀代には定形化した集落が見られるようになるという傾向が指摘されていた。9次調査では同じく11世紀代から遺構が見られるようになり、13世紀後半頃までは各時期の遺構が平均的に検出されている。しかし、14世紀代になると遺構はわずかに見られるだけになり、そして15世紀代には井戸と溝とわずかな柱穴だけがあるという状況になる。これは他の調査地点とは明らかに異なる傾向であろう。この差異の要因として考えられるのは菅崎宮の存在であるが、中止における菅崎宮の範囲は現在判明していない。ここで2次調査地点において検出されていた建物布張溝状遺構について触れておきたい。遺構の性格は建物布張溝か築地盤の下部構造かは明確ではないが、9次調査地点においてもこの延長と思われる溝SD-01が検出されている。2次調査において時期は確定されていないが、方向軸はSD-01が8°東偏するものの幅は40cmと同じであり、仮にこれらの溝が一連の遺構であるとすれば菅崎宮南側に明確な区割りが存在していたことになろう。加えて2次調査では建物地業が検出され、「坊」等の建築物の基礎構築物の可能性が考えられている。

これらの調査成果に私見を交えまとめてみると、9次調査地点を含めた菅崎宮境内に隣接する一带は菅崎宮が創建された当時は宮域内ではなかったが、度重なる再建のうちに菅崎宮の境内範囲内に取り込まれていったことが想定できる。これは9次調査地点において13世紀末以降、それまで平均的に見られていた遺構が極端に減少したことに裏付けられよう。13世紀後半といえば、二度にわたる元寇があり菅崎宮も焼失し再建されており、この時に宮城に取り込まれたのであろう。そしてこの再建時に一定の区画をもった坊等の空間に利用された可能性が考えられるのである。

現在、創建時から近世までの菅崎宮の範囲の全容、またその付随施設である「箱崎ノ津」といわれた菅崎宮の私的港、その周辺に展開していたであろう町屋等の位置も解明されておらず、都市としての箱崎遺跡群については未解明の部分が多く残されている。「箱崎ノ津」については宇美川が西にもっとも蛇行する地点が菅崎宮の南門から直線上にあり、この一帯に存在していたことが想定できる。現在の遺跡境界線東端はJR線路西側に設定されているが、県道堅粕線から東側については発掘調査が行なわれていないので、遺跡の東端境界は今後の発掘調査の検討課題であろう。開発の速度が活発化している箱崎遺跡内において菅崎宮を中心として展開した箱崎遺跡の都市空間の復元も重要な課題となるであろう。

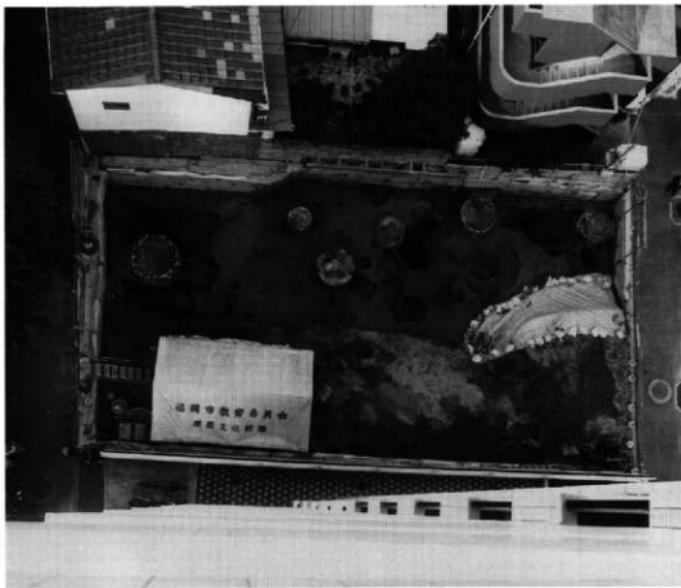


写真1 調査区全景北側（南から）

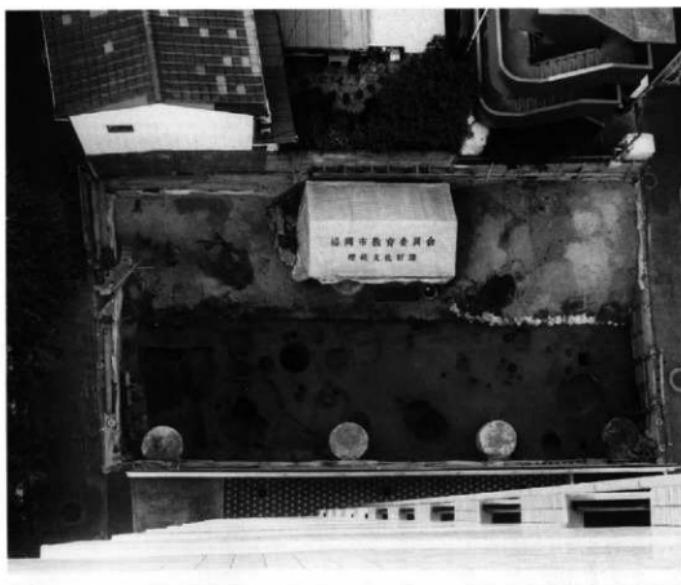


写真2 調査区全景南側（南から）

写真3 SE-01 完掘状況（北から）



写真4 SE-06 完掘状況（北から）

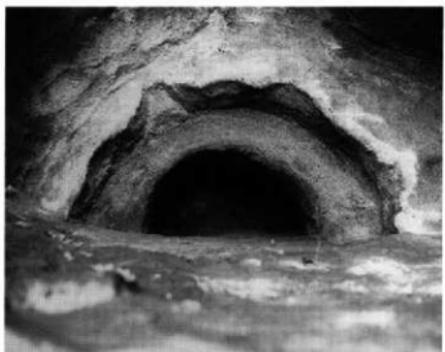


写真5 SE-08 完掘状況（東から）





写真6 SE-09 完掘状況（南から）



写真7 SE-10 完掘状況（南から）

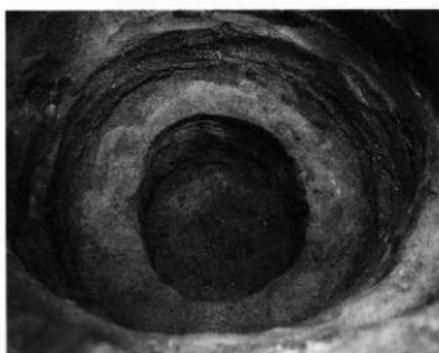


写真8 SE-12 完掘状況（東から）



写真9 SE-01出土遺物



写真10 SE-09出土遺物



写真11 SE-04出土遺物



写真12 SE-09出土遺物



写真13 SE-09出土遺物

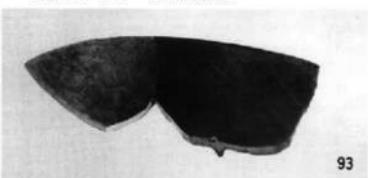


写真14 SE-10出土遺物



写真15 SE-10出土遺物

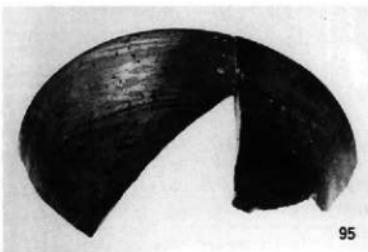


写真16 SE-10出土遺物



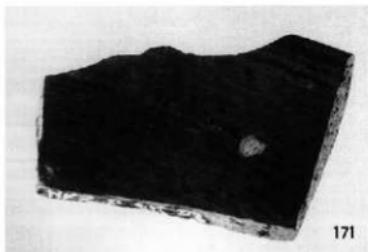
182

写真17 SE-10 出土遺物



95

写真18 SE-10 出土遺物



171

写真19 SK-22 出土遺物



116

写真20 SK-28 出土遺物



121

写真21 SK-28 出土遺物



178

写真22 SK-62 出土遺物



150

写真23 SK-64 出土遺物

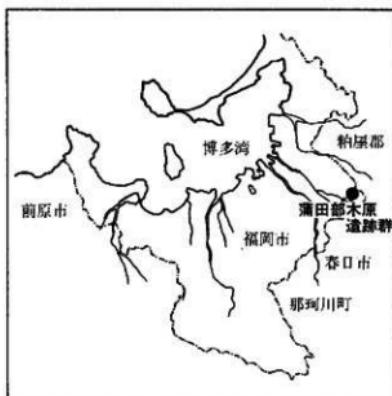


186

写真24 SE-09 出土遺物

蒲田部木原遺跡 5

— 蒲田部木原遺跡群第5次調査 —



遺跡略号 K H H - 5

調査番号 9 6 5 2

例 言

1. 本書は東区蒲田2丁目787、788-1における倉庫建設に伴い、福岡市教育委員会が平成8年度（1996年度）に実施した蒲田部木原遺跡群第5次調査の発掘調査報告書である。
2. 遺構の実測は長家伸、平本恵子、吉村智子、山野妙子が行った。
3. 遺物の実測は長家、林田憲三が行った。
4. 製図は長家、山野、戸畠智恵子が行った。
5. 遺構写真は長家が撮影した。
6. 遺物写真は長家が撮影した。
7. 遺構番号は通し番号とし、遺構の性格を略号で頭に付して呼称している。遺構略号は竪穴住居跡（S C）・土坑（S K）・溝（S D）・ピット（S P）である。
8. 遺物番号は通し番号とした。なお挿図中の遺物番号と写真中の遺物番号は一致する。
9. 本書で用いる方位は磁北であり、真北から6° 21' 西偏する。
10. 本書に関わる図面・写真・遺物等の全資料は福岡市埋蔵文化財センターで収蔵・保管されるので活用されたい。
11. 本書の執筆・編集は長家があたった。

遺跡調査番号	9652	遺跡略号	KHH-5
調査地地番	東区蒲田2丁目787、788-1	分布地図番号	蒲田2
開発面積	4,363m ²	調査面積	936m ²
調査期間	1996年10月21日～11月16日		

I はじめに

1. 調査に至る経過

平成8年3月1日付で安倍秀太氏より埋蔵文化財課宛に東区蒲田南2丁目787、788-1の2筆の物件（計4,363m²）に関する埋蔵文化財事前審査願が提出された。（事前審査番号7-2-519）。申請地は周知の埋蔵文化財附蔵地である蒲田部木原遺跡群（分布地図番号2-0003）に含まれており、これを受けて埋蔵文化財課では平成8年4月11日、15日の2日間で対象地内の試掘調査を行った。この結果対象地の北側を中心として、表土下100～170cmでピット・溝を検出した。埋蔵文化財課では申請者に対して遺構が存在する旨を回答し、その取扱について協議を行った。この結果倉庫建物を設計当初は申請地北側に建設予定であったものを遺構密度の薄い南側に変更し、遺構の破壊が避けられない基礎杭列についてのみ発掘調査を行うこととした。この際の調査範囲は試掘で遺構が確認された北側3列にする事となった。また建物部分については簡易な構造であること、駐車場部分については掘削が遺構面まで至らないことから盛土保存とした。以上の協議を受けて委託契約を締結し発掘調査・資料整理を行うこととした。

発掘調査は平成8年10月21日～平成8年11月16日の期間で行った。調査対象地は約936m²で、調査面積は924m²である。また遺物はコンテナ6箱出土している。

現地での発掘調査に当たっては、土地所有者である安倍秀太氏、安倍秀一氏、都地進男氏、光安辰次郎氏、施工会社上村建設株式会社の皆様には調査についてご理解を得ると共に多人なご協力を賜りました、ここに記して謝意を表します。

2. 調査体制

事業主体 安倍秀太、安倍秀一、都地進男、光安辰次郎

調査主体 教育委員会埋蔵文化財課

調査統括 埋蔵文化財課長 荒巻輝勝 第2係長 山口譲治

調査庶務 第1係 西田祐香

調査担当 第2係 長家 伸

調査作業 柳瀬伸 脇田栄 寺園恵美子 小川博 村本義夫 安元尚子 小路丸嘉人 平木恵子

整理作業 永田優子 指原始子 花田剛子 池型子 大音輝子 吉村智子 小池温子 中村幸子

増田ゆかり 草場恵子 高津千尋 岸原千秋 小路丸良江 今林加津江 山野妙子

久保山勝弘

II 調査の記録

1. 調査概要

Iの項で述べたように発掘調査は対象地内の建物基壇部のみを対象として行い、東西に3本の幅4m程度のトレンチ状の調査区を設定した。調査区は便宜上北から1区、2区、3区と呼称した。調査は遺構面を重機で除去することから始めた。全体に造成土による盛土が厚く全体に60cm～100cmに及ぶ。以下旧水田土・床土が広がり、調査区南部分には遺構面との間に弥生時代～古墳時代の小破片を少量含む遺物包含層が形成されている。遺構検出面は黄緑色シルトで一部に粗砂・礫が露出している。遺構面は調査区の北東から南側及び西側に向かって緩やかに傾斜している。標高は北東部分で



第13図 調査地位置図(1:4,000)

13.2 m、西端部分 12.8 m、南西部分で 12.3 m をそれぞれ測る。

検出遺構は溝・土坑・ピットで分布状態はそれほど密ではないが調査区全体でまんべんなく検出している。また各調査区幅が狭いことと調査区間が 10 m 以上ひらいているために、各遺構の有機的関係については不明な点が非常に多い。遺物は殆どが小破片であり、出土量も少ないため遺構の所属時期を決めがたい遺構も少なくない。また縄文土器が比較的多く出土している。殆どは小破片で磨滅が進んでおり、直接遺構に伴うものとは考えがたいが周辺に該期の遺構が広がっていると考えられる。

2. 遺構と遺物

溝 (SD)

溝はそれぞれのつながりは明らかではなく、互いの関係についても不明な点が多い。また全体に遺物が少なく時期決定が困難である。

SD 001 (第 16 図)

1 区南側で検出する。幅 90cm ~ 120cm、深さ 40cm ~ 50cm 程度を測る。溝底標高は 12.65 m 前後では平坦である。土層の観察から溝の掘りさらえを想定でき、当初の溝は埋土暗褐色土で両壁一段平坦面を有する 2 段掘りで、掘り変えた溝の埋土は上層褐色土下層黄褐色土で壁は比較的緩やかに立ち上がり、溝底は緩く窪んでいる。出土遺物は僅少で破片も小さいものばかりである。図示得たのは縄文土器のみであるが遺構の直接の時期を示すものではない可能性が高い。

出土遺物 (第 17 区 1 ~ 3)

1 は浅鉢である。小破片で磨滅が著しい。2 は晩期の深鉢である。口縁下に刻み目突帯を有し、口



第14回 調査区位置図(1/1,000)

唇部にも刻み目が有る。3は波状口縁を呈する深鉢で後期に位置づけられる。内外面に条痕文を施す。

SD 004 (第16図)

1区西側で検出する。幅50cm~60cm、深さ20~40cmを測る。溝底標高は12.5m前後ではほぼ平坦である。埋土は上層暗褐色土、下層は粘質な黒褐色土である。壁は北壁の方が真っ直ぐに近く立ち上がり、南壁はやや傾斜を有する。溝底は凹凸がなく中央がやや盛む。小破片のみで遺物は非常に少ない。図示し得たのは純土器のみである。

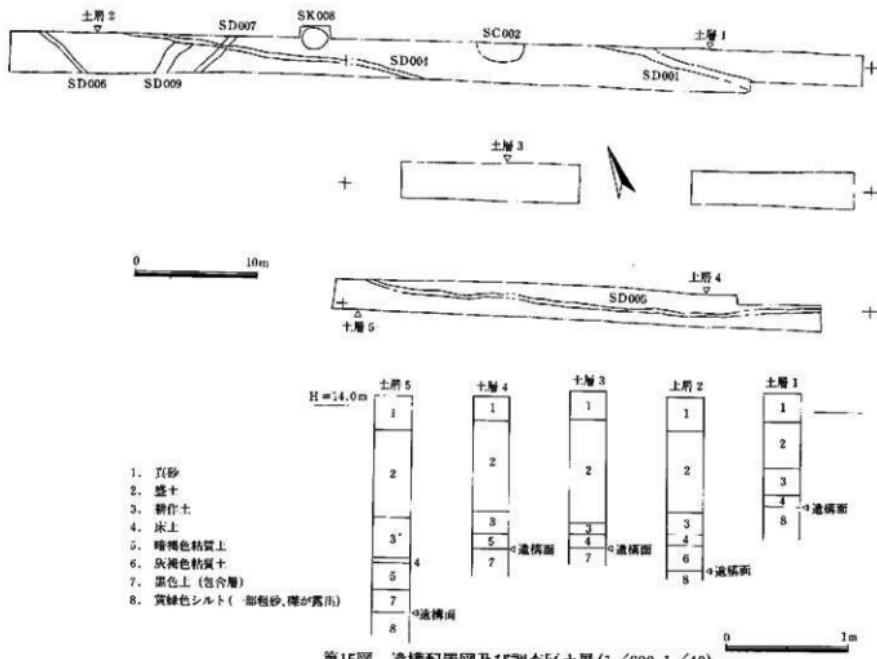
出土遺物 (第17図4~6)

4は晩期の深鉢である。口縁端部外面と端部から5cmさがった所に刻み目を巡らせる。5は晩期の浅鉢である。口縁部上端に刻み目を有する。内面はヘラミガキ、外面には条痕を施す。6は黒曜石製の石鏃である。

SD 005 (第16図)

3区で検出し、調査区内をほぼ縦断する。幅50cm深さ10~20cmを測る。溝底標高は東端12.55m、中央付近で12.5m、西端で12.37mを測り中央付近から西側にかけて緩く傾斜している。埋土は暗褐色土で砂の堆積は全く見られない。溝断面は浅皿状を呈し、底面は平坦で凹凸はほとんど見られない。遺物はほとんどなく小破片のみであるが、古墳時代後期に属する須恵器が出土している。

出土遺物 (第17図7、8)



第15図 造構配図及び調査区土層(1/600, 1/40)

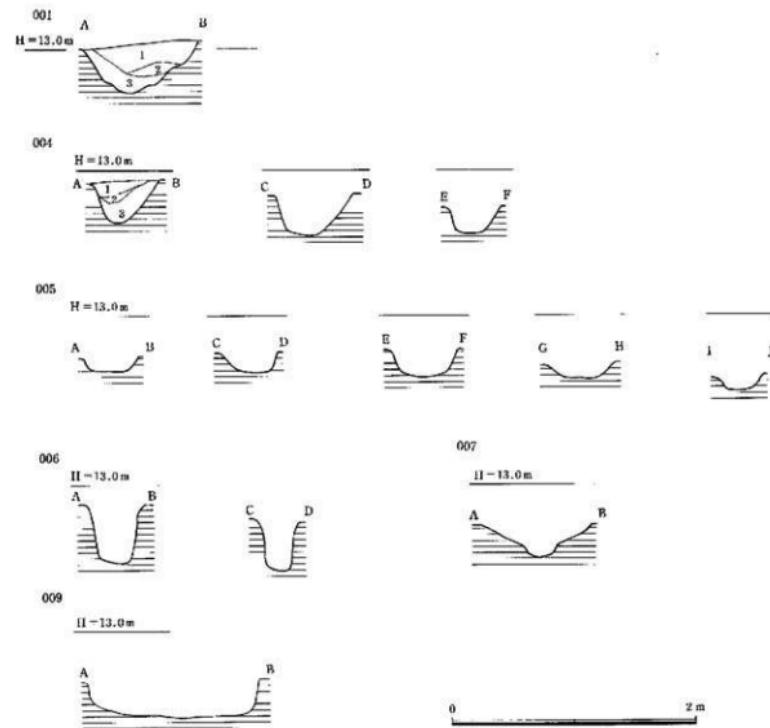
いずれも須恵器である。7は壺蓋である天井部外面には回転ヘラ削りを行う。8は壺身である。受け部のかえりは内側に傾斜して立ち上がる。

SD 006 (第16図)

1区西端で検出し、溝査区内をほぼ横断する。幅50cm深さ40~50cmを測る。溝底標高は約12.35mで平坦である。壁は両壁とともに直立し掘り方は非常にしっかりしている。埋土は暗褐色土で砂の堆積は全く見られない。溝底標高、埋土、溝の延伸方向からSD 005とつながる可能性が考えられる。遺物は剖面標の基部破片の1点出土する以外ほとんど小破片のみであり、時期は不明瞭であるがSD 005との関連で古墳時代後期の可能性が高い。

SD 007 (第16図)

1区で西側で検出し、調査区内をほぼ横断する。北側をSD 004に切られる。幅70cm深さ30cmを測る。溝底標高は北端12.5m、南端で12.35mを測り南側にむかって緩く傾斜している。埋土は灰褐色粘質土で砂の堆積は全く見られない。溝断面は壁は「ハ」字状に綏やかに開き、中央部が一段深



第16図 溝断面実測図(1/40)

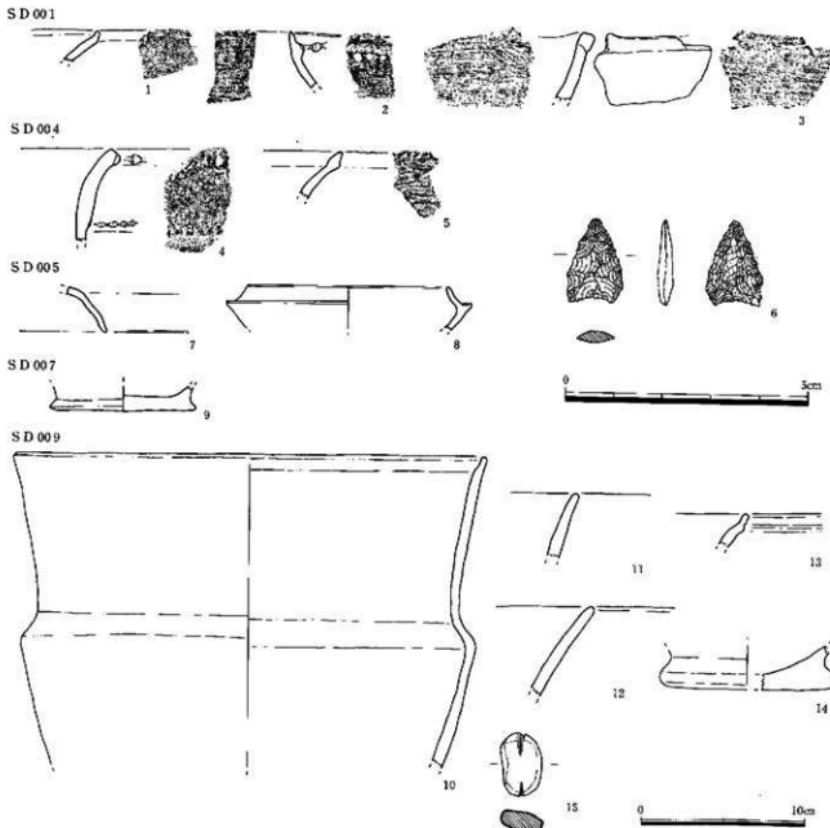
く掘りこまれている。底部は緩やかな弧を描く。遺物はほとんどなく小破片のみであり、図示し得たのは縄文土器のみである。

出土遺物（第17図9）

15は深鉢の底部である。下端部分が高台状に張り出す。内底面は粘土板が剥離し器壁が薄くなる。磨滅により調整は不明である。

SD 009 (第16図)

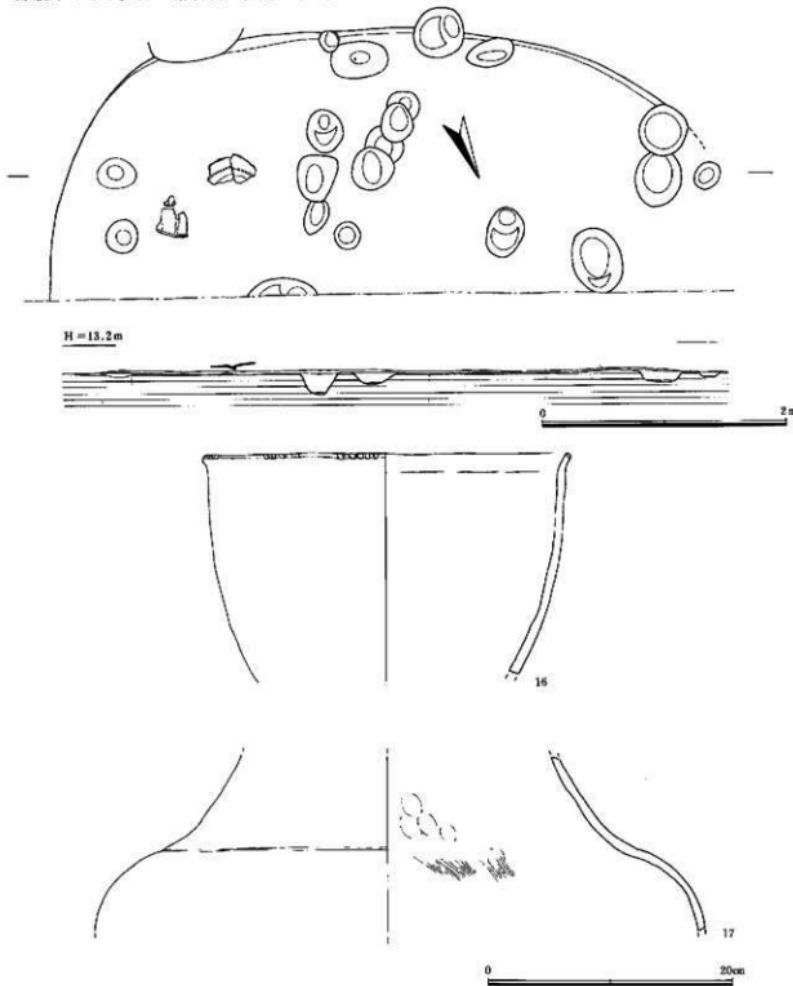
1区で西側で検出し、調査区内をほぼ横断する。北側をSD 004に切られると考えられるが、これ以北では平面・断面共に溝の延長部分を確認することができなかった。幅140cm深さ15cm～30cmを測る。溝底標高は12.3mを測る。埋土は淡褐色土で地山との判別が非常に困難である。溝断面は箱形を呈し、底面は凸凹がなく中央部が緩く窪む。遺物は小破片のみで縄文時代後期の浅鉢・深鉢が出土している。



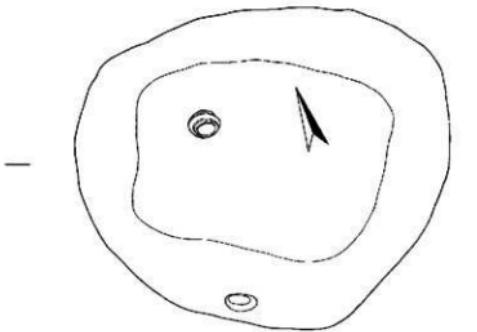
第17図 溝出土遺物実測図(6は1/1、残りは1/3)

出土遺物（第17図 10～15）

10は屈曲する脇部をもつ深鉢である。口縁部の内面は凹線状に窪ませる。器表面の残りが悪いため不明瞭な所もあるがミガキに近いナデを施している。本来は黒色を呈するものと考えられるが表面には赤色の化粧土を塗布する。晩期前半のものであろう。11・12は後期後半～晩期前半の粗製深鉢である。11はナデ、12は条痕による調整を行う。13は晩期の浅鉢で口縁部に2条の沈線を施す。14は底部破片である。15は滑石製の石錐である。



第18図 SC002及び出土遺物実測図(1/40, 1/4)



H = 13.0m

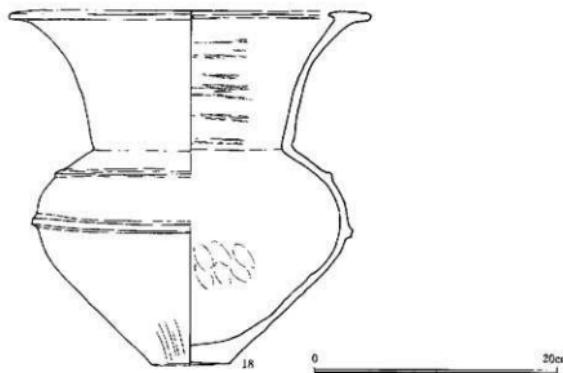


H = 13.0m

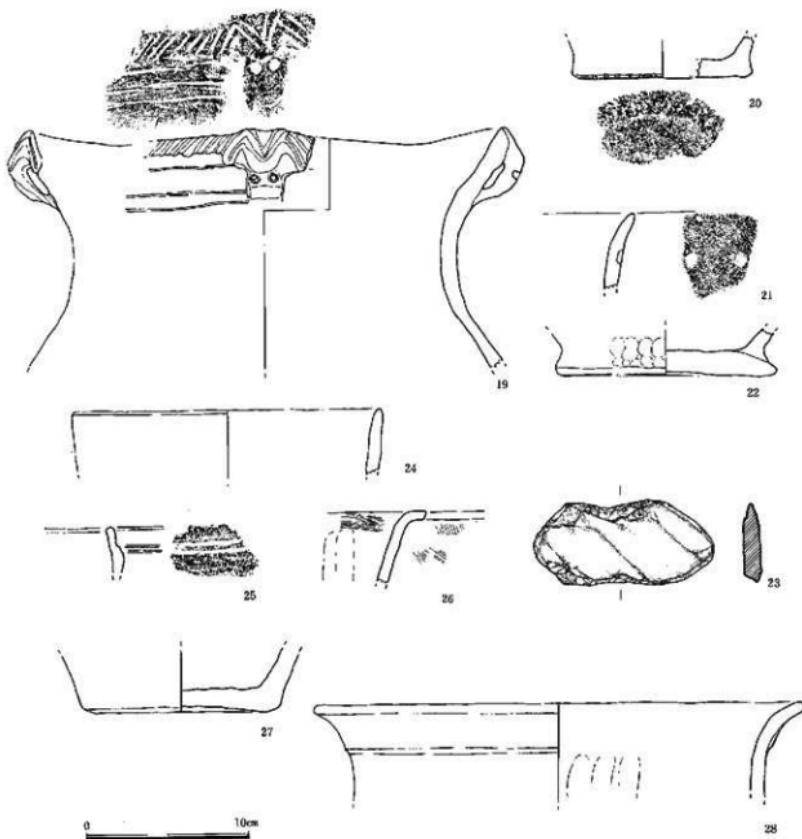


- 1. 暗褐色土
- 2. 純灰褐色土
- 3. 淡褐色土
- 4. 黄褐色ブロック認りの
淡褐色土
- 5. 4と同じ
- 6. 黒色土
- A. 黄褐色シルト
- B. 粗砂+砂礫

0 2m



第19図 SK008及び出土遺物実測図(1/40, 1/4)



第20図 その他の遺物実測図(1/3)

壁穴住居跡 (S.C.)

S.C. 002 (第18図)

1区中央部分で検出する。壁の残りが高く南壁の一部が高さ3cmほどしか確認できなかった。平面は円形～楕円形を呈すると考えられる。東側に円形に弛山が被熱した部分があり炉跡と考えられる。またその前面臺と臺が横倒しで潰れていた。主柱等は不明である。

出土遺物 (第18図)

16は如意状口縁を有する壺である。下半1/3を欠失する。口唇部前面に刻み目を有する。色調赤

褐色を呈し、胎土には径5mm以下の砂粒を多く含んでいる。磨滅により調整は不明。17は壺である。口縁部及び下半1/2を欠失する。頸部の屈曲部分には浅い沈線を施す。内面の屈曲部分に刷毛目が残る。

土坑（SK）

S K 008（第19図）

調査区中央で検出する。平面はやや歪な隅丸の長方形を呈し、深さ50cmを測る。壁は緩やかに立ち上がり、底面は凸凹がなく平坦である。底面の直上から壺が出土しほぼ完形に復元される。

出土遺物（第19図）

動状の口縁部を有する壺である。一部欠損するがほぼ完形に復元できる。胴部の最大径部及びその3cm程上部に各1条の突帯を貼付する。器面は磨滅が進んでいるが、外面の最下部及び頸部内面にヘラミガキが残る。

その他の遺物（第20図）

ここでは確実に遺構に伴わない遺物及びピット出土の遺物を報告する。

19～22はS K 008出土である。19は波状口縁を有する深鉢である。口縁部断面は三角形を呈し、外面委連続する斜めの短い沈線を施す。波状口縁の頂部には粘土帯を貼り付け、粘土帯上部は全体をM字状に整形して、2本のM字状の沈線を施している。粘土帯の下部は橋状に作り、2箇所に未貫通の穴をあけ、一見動物の鼻の様な形状を成している。口縁直下には横走する3本の粗い沈線を引いている。内外面共にナデによるが、外面には条痕を施した後にナデ消している可能性がある。後期中頃の北久根山系統の上器である。20は底部破片で立ち上がり部分に1cmおきに刻みを有する。21は深鉢の口縁部で口縁下3cmの所に棒状工具による刺突文を3cm間隔で施す。22は前面赤色を呈する阿高系の底部である。滑石を大量に含んでいる。指によるナデ仕上げで外底部は凸凹が著しい。

23はS D 005出土の石錘である。石質は結晶変岩である。長辺部の両側に敲打痕が残る。

24・25はS P 111出土の粗製深鉢である。25は屈曲部の上に沈線を2条施している。

26は1区表土の出土である。底部両面に擦痕が残るが磨滅のため詳細は不明である。

27は試掘時に出土した弥生時代前期に属する壺の口縁部である。

3. 小結

今回の調査は基礎部分のみのトレンチ状の調査区であったため、対象地内の遺構の関連等については不明な点が非常に多い。時期が明らかな遺構は弥生時代前期の住居（S C 002）、中期の土坑（SK 008）、古墳時代後期の溝（SD 007）である。また各溝については遺物の量が非常に少ないとや確實な時期を示す土器がないため、図示可能な純文土器を提示したが、遺構の掘り方・埋土等から大半はこれ以降の弥生・古墳時代に属する可能性が高いと考えられる。また今回の調査では中期～晚期に属する繩文土器が多く出土している。遺構に伴うものは少ないと考えられるが全体に占める出土量も割合多く周辺に該期の集落が存在した可能性が考えられる。また遺物は中・後期の破片は割合大きいが点数は少なく、後期後半～晚期前半の遺物は磨滅した小破片が多いものの点数は多いと言う特徴がある。

周辺調査が増加することにより、各地代の様相も明らかになると想われる。



写真1 調査地点全景（北東から）



写真2 1区全景（東から）



写真3 1区全景（西から）

写真4 2区全景（西から）



写真5 3区全景（西から）



写真6 SD 006（西から）





写真7 SD 001 土層



写真8 SD 004 土層

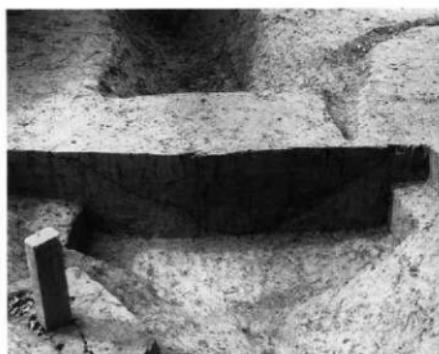


写真9 SD 007 土層

写真10 SC 002（南から）



写真11 SC 002（西から）



写真12 SK 008（東から）





写真13 SK 008 出土状況（北から）



写真14 SK 008 土層

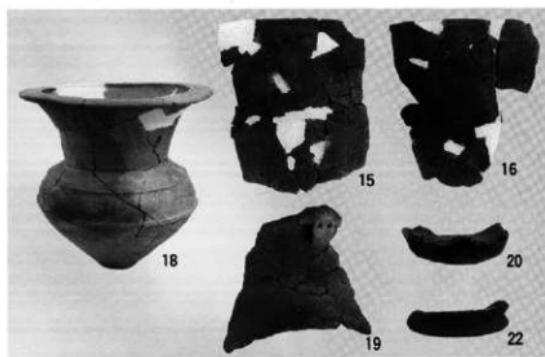


写真15 出土遺物

箱崎遺跡 5、蒲田部木原遺跡 5

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第 550 集

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷 川本印刷株